



東京開化繁昌誌
第一輯
全一冊

76
1788
4



門 呂
1.788
卷 1-2

萩原乙彦先生著
三木光齋先生畫

淨書
東園生
陸

東京開化繁昌誌
初篇

官許
東京書肆
萬青堂梓

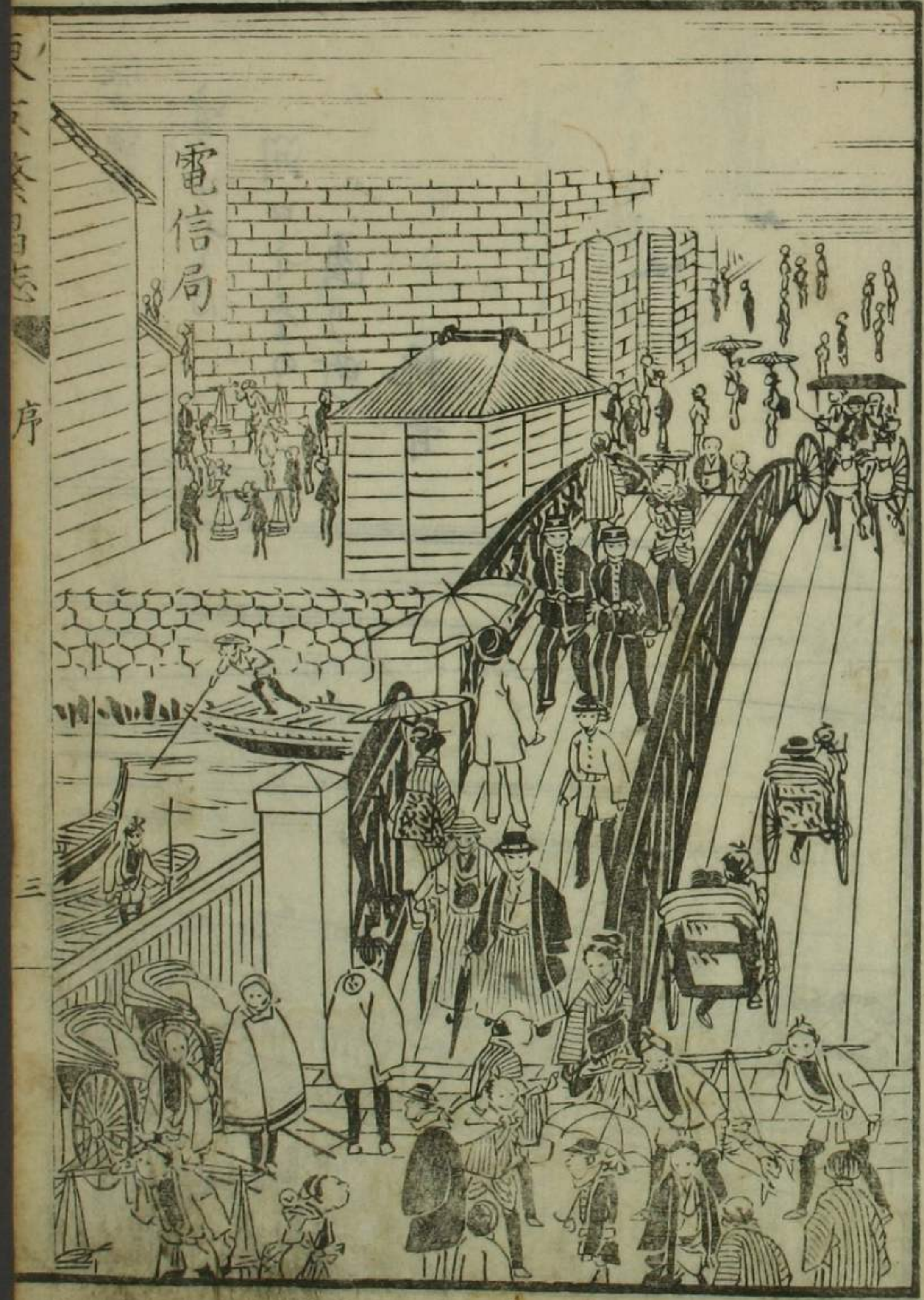
望 祥
新 暉
四

墨椽

杜若先生逸歌

關

關



東京の風景
序



日本橋 川口江東
橋下一條水五洲
遠可行今日蠻人
度西風笑子平

紫の本

一石うらむ

江戸橋うらむ

二ほん

たうら

陶子

日本橋

江戸通町

宝小や舟

間口千石の

通り町

桃青



俳諧書の埃

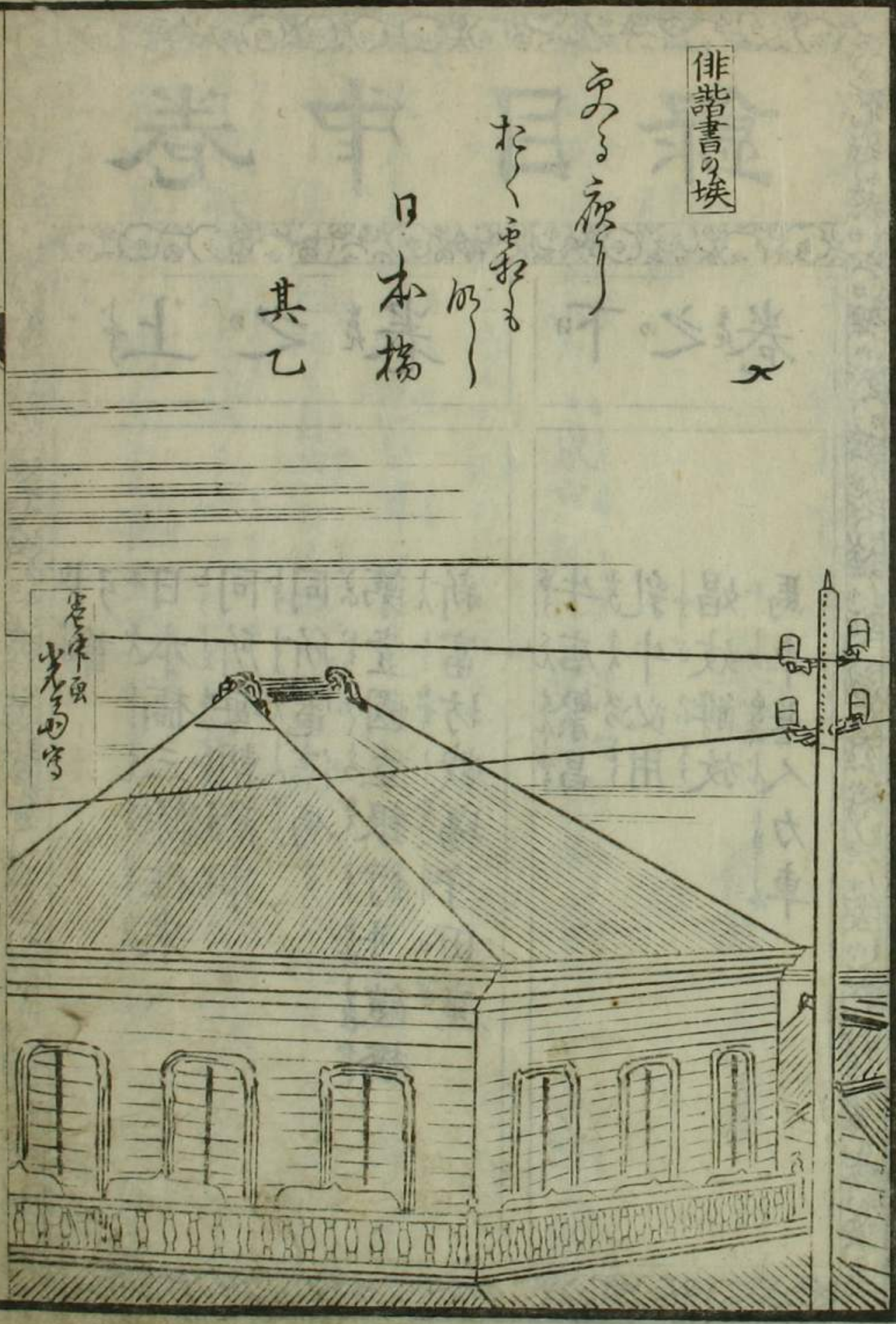
あゝ恋

た〜ちね

何

日本橋

其乙



巻末
光三郎



卷中目錄

卷之下

卷之上

馬車 人力車	娼妓 解放	乳牛 必用	牛店 繁昌	新富 坊戲 場守 田座	第壹 國立 銀行 并 鐵橋	同所 電信 局	同所 每朝 魚市	日本 橋三 條往 來	引首
-----------	----------	----------	----------	----------------------	---------------------------	---------------	----------------	---------------------	----

東京開華繁昌誌第一編卷之上

東京 萩原乙彦著

引首

維新萬歲盛大なる。東京開化の繁昌繁華。普天の下各國よ比ま
 履き地幾許ある。支那の北京順天府。佛蘭西の巴里。英吉利斯の
 倫敦。魯西亞米利堅を算あるとも。五指を屈して止めべし。蓋美穀乃
 國中よ。饒沃冠たる自然の地勢。今を距るまると既中し。四百十有
 七年前。敏く這吉兆あり。水戸の黃門光國卿の訂正開版せられし。其
 鎌倉大草紙を閱するも。長祿元年。復四月。上杉修理大夫持朝入道
 武州河肥の城を取建ら。太田備中守入道。岩付の城を取立ら。

東京開華繁昌誌第一編卷之上

引首

一

同左衛門大夫へ江戸の城を取立らる云々此は左衛門大夫といふ婦幼
 も其名を傳へ聞く巨田道灌即ち是あり當時京都五山の僧
 万里和尚と喚ばる者江戸の築城功成しを道灌が為し古語を摘
 窓舎西嶺千秋雪門繫東吳萬里舟云々此地必は繁昌せんを賀せし
 今を未然に知る是個僧の口を假て聽す皇國の樂きんを天告
 ありと謂ふべし余れども當時の城とりぬ今も陣屋の体は
 して外面の匝匝へ牆壁或は竹木の柵行馬屋宅の製造方も
 板家棟茅葺簀戸あり一年道灌上洛の時其地を勅問ありしに
 我庵も松原つぎ海迫く富士の高峯を軒端みを見るの歌
 を以て知りぬべし今見る大石累々たる城郭もくハ歌なりとて

俺庵といひぬべし瓦鱗鐵門の結構も天正以前の制も無し
 東照宮遠地は居を移させられ後も猶年久しく大手乃門も
 簀戸も有りける由古老の申傳へり事蹟合考も記し其後
 十七年を経て大城を新築せり茲年慶長十一年三月より經始して
 土木の計營神速なりけん九月に至りて落成せり西丸即ち是なり
 道灌遺跡も本丸あり抑道灌其甫這城郭を繩張せり豊嶋郡
 峽田領江戸と稱す内なりたる千代田宝田祝言といふ三箇村を
 圍ひしなり其名の佳るを吉瑞とて千代田の城と稱す即ち
 今の吉瑞なり彼の萬里の舟はさらなり異船までも數百艘繫ぎ
 止む皇國の勢ひ開闢未曾有の文明開化天保年間發行

せー江戸繁昌記の數編は未ぞ載る所なり。且其書は謂ふこと
有り。昔者平氏や源氏や北條氏足利氏其相代りて盛んなる當時
孰り謂きしむ。繁昌焉より過ぐる莫し。平氏焉んぞ知らむ。
源氏の盛んなる有んと。北條氏焉んぞ知らむ。足利氏の繁昌有ん
と。云々。嗚呼居士も亦焉んぞ知らむ。今の文明開化なるを。又曰く。
其極を俟て之を記せんと云々。霸業の盛衰必然なるも。其極を
あそ候もまじ。今の繁昌も無極なれば。何ぞ俟べき期あらん。今年の
是今年の開化誌は。幾なる所來年の又來年の。其化誌必む有
ぬべし。都太平の御恩澤孰も尊と仰がさしむや

日本橋三條往來

東京地方の中央たる國の名は喚ぶ日本橋也。是秋津洲の太極めて
兩岸部分て八十餘州の道程の起本とす。昨日所謂江戸四里四方々
即ち是より算るあり。本土諸州の老若男女異域各地の貴賤
賢愚競ふ。本地は聚る者此橋を過ぬ。此橋を過る者先
金位を向望れむ。天は連接して涯なし。次は木位を見下せば。地は
稠密して空あらば。此に至りて駭然とす。又さして邈然として足の
踏所を知らざるなり。其涯なき者ハ何をや。玉堂鸞臺亭々たる。
上は芙蓉峰元と。四季の分ちもあたら妙の雪の頂皎々たるも。
銀河は酒を飲と疑り。是以涯なし。其空あたらざる者ハ何をや。
商屋酒樓連軒たる。街衢の往來縱橫群集他ハ自を凌ぎ。自ハ他を

凌ぐ。不要撞とて右をれば前より進む人の足を踏んことを憚りて。左をれば後より。逼る人の爪先は已が踵を蹴られず。自又他を踏むを得ざる。其多慢所を咎め難し。倘之を咎めざる。忽地木者と惡れ。苦楚を喫つと罵る。之を捉ふんと欲すれば人々隔られて相敵ハ影なし。浩る中を何まう有る。一道塵跑来る者あれば飛也似走去そのあり。這紛擾のまならず。繁昌記より公侯の長槍往来林乃如き。方今曾て无しと雖も。換るは馬車あり。人力車あり。並んが往来を跋扈すれば。虞芮の君も之を見まハ訴へを止む。浩れば倍雜速し。俗は立錐の地ありといふ。是以空あり。道路斯の如く。いさなり。橋下の川幅廣うらさる。を遠豆相房兩總の六ヶ國より

積送せ。魚鱗數萬艘出入宛も織がごとく。張歛を相呼合ふ人聲喧々として勇ましく。船々因々として鳥銃丸の走るが似き勢ひ。摺違ふこと一髪間。陸續として間斷無るれば。水面總て舟よして一橋帝數限る。舟の上は横なる。川なることを忘れんと。此橋昔慶長八年幕府江戸の町割を命せし。時始て架らる。見聞集よ云川中つ両方より。石垣を築出し掛たまふ。敷板の上三十七間四尺五寸廣さ四間二尺五寸あり。畧又云此橋御普請の時分。日本國の人集めて掛る橋なり。此橋の名を人間曾て以て名付せ。天より降らん。地より出らん。諸人一同は日本橋と呼ぬること。希代不思議と沙汰せりと云々。其後人家漸々稠密

一々。丙災屢あり毎一南北の兩岸を軌となく築地ふたむ。江戸
 砂子よの橋の長さ凡二十八間とあり。勾欄擬寶珠の結構る。所謂
 江戸子の自慢なり。曠昔の舊弊今鳥の維新掛更り。て
 美麗壯觀橋上の路三條に分ち。中央ハ車馬の往来。歩一々
 河南へ行く者ハ其東の條に倚り。歩一々河北へ行くものハ
 其西の條に倚る。但見る組入の一新橋。折梁柱他一木多揮て
 規の如鱗水質あり。得難くべき良材なるを。惜むらくハ青へキ
 せて。塗抹しければ。木質糲糊と。婦女子ハ知らず過なん。
 橋詰の両邊に標石建てり。高さ凡そ五尺計。幅壹尺壹寸五分
 四面。縮圖則ち左のおとく。

日本橋

石 面 石 背

紀元一千五百三十三年五月三十一日成

是河北に建る所の標石なり

石 面

日本橋

石 背

明治五年十一月二十七日創
工至六年五月三十一日成貫
皆出於會議所蓄積

是河南建所の標石あり

右標石之縮臨

秋巖門人

小室樵山



件の標石西基とも家父秋巖の揮毫ふりて石工廣群鶴之を鐫る。
盛大斯のごとくは宜なり。稚兒輩が双陸よ振出しとりのそあらは
此地乃ち文明開化の開敷と謂つべし

因より廣羣鶴も方今石工中の高手且名家なり其先某
齋藤實盛の苗裔江戸開府の始向島に墨田川の東畔を
蓮華寺と共に鎌倉より移住し其孫喜右門に至りて元文
年間谷中故の善光寺門前町に家居せしより茲より五世
依然とて地を離さば工業を襲て安居せり其畧系を
左に擧

石工初代喜右門 初メテ東都谷中故善光寺 二代目喜右門 住同地續業
門前町に家居シテ開業ス

三代目喜右門

号群鶴氏ヲ廣瀬ト改ム此人養子ナド疑フラス其實家ノ氏カ
天保九年ニ没ス男アリ群龜ト号セシガ早世セリ家ヲ弟子讓ル

四代目喜右門

号群燕
天保十二年ニ没ス
五代目今の群鶴
群燕ノ弟子后養子ト
ナリテ家督ニ業傳代ニ

秀出
セリ

有此舊家なりけるも。當時偶尋問も入廣瀬羣鶴と称へ
てハ。近隣もとも知る者あり。只石屋の喜右門なり。其地を
管る家主まも。知らず顔して過す者ハ元来平民。其地を
故。氏ハ称ふべもあらば。群鶴ハ私号ゆ。公然とハ称へ
難う。御一新の時。遇て。苗字も号も公然。と。更
ら。至り。對鄰ハ勿論。朝夕通ふ納豆賣炭。男糊り。婆。菜行。屠鱗。見酒屋。の。丁稚。花行。水行。油。鍋釜

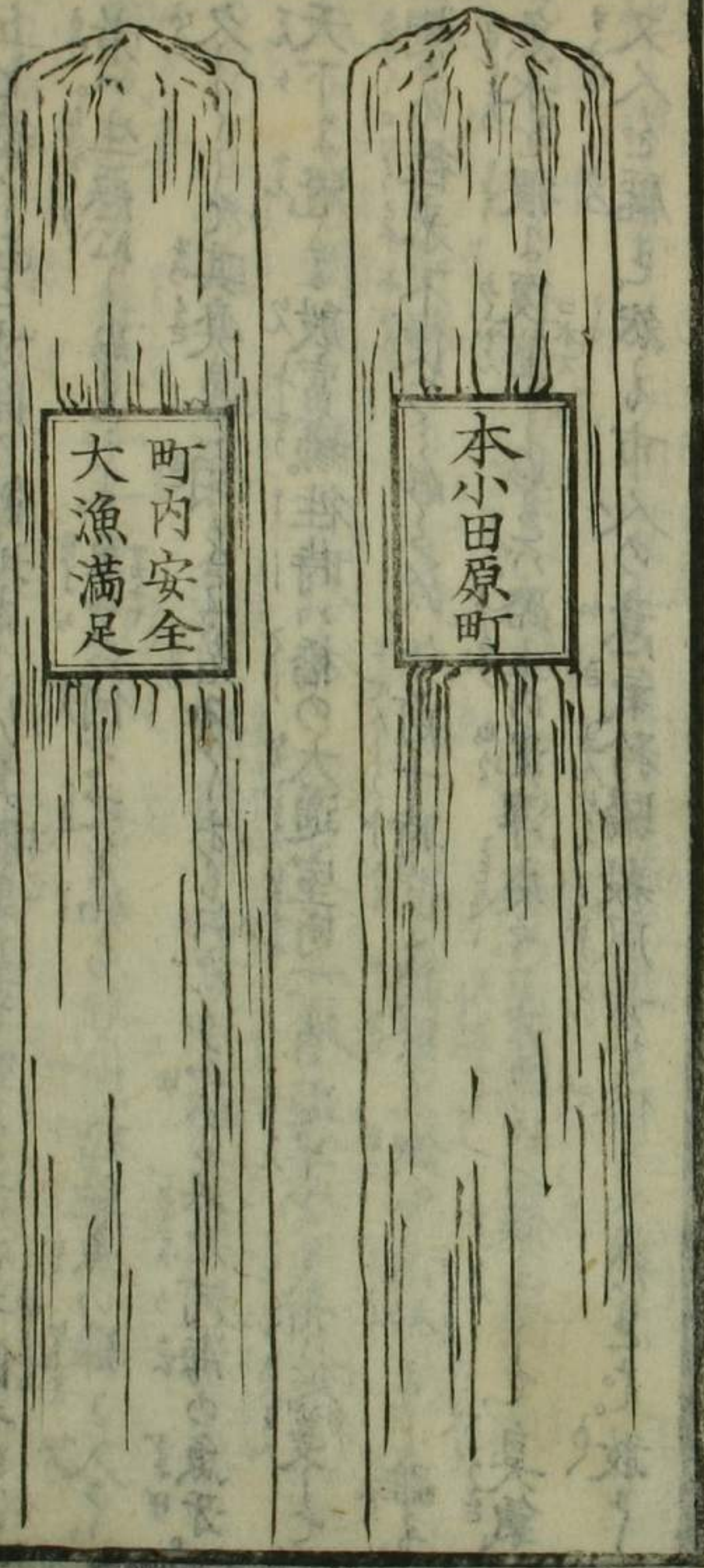
鑄のけ雪踏ま。盲人按摩針も。群鶴の名を問ハ那處

の石店と。示。即ち開化の餘澤あり。日本橋魚市

日本橋魚市

日本橋の下流一條。是即ち五大洲へ遠く行くべき水原。亦彼
より来る目的。方今に至り。夷客蠻人交度り。珍物
異品を競ひあ。宛も佃の雜魚。似。況や國內の名産佳味
聚らる者。前。六ヶ國より。積送る水族。且
漁り。暮。来。夕。漁。朝。寄。所謂魚鱸の。近海。科戸の風の順逆。潮汐を。浪押開。快。就中多きの。豈六ヶ國の魚肉を以て。都下百萬の口腹を。

飽しも不足のなほむや。唐封公の制度ありけ。廣徳廣利
 廣運廣澤よ有の産鱗幾万億頭一年三百六十五日運漕まること
 間斷あらず其一二箇をいとも。北海道の鰺魚鯨鮪北越の大目魚鮫も
 美味と賞せらる。仙臺黒満魚水戸比目魚下品故廉價なり其
 他の枯魚鰓魚類鮓鱈子靈螺海魚腸水國各地の名産なる。千品方種
 數を盡して累々たること山の似く。又羅列して海の似く。寒暑晴雨
 ち構らる。毎曉天の用市場も橋の南北兩所あり。本材木町を新場
 とし。四日市相接して。枯魚脯肉を鬻販も共是橋南なり。橋北は
 小田原町を首とし。這地登く常夜燈を直立して。兼て町名を
 標した。左のごとく

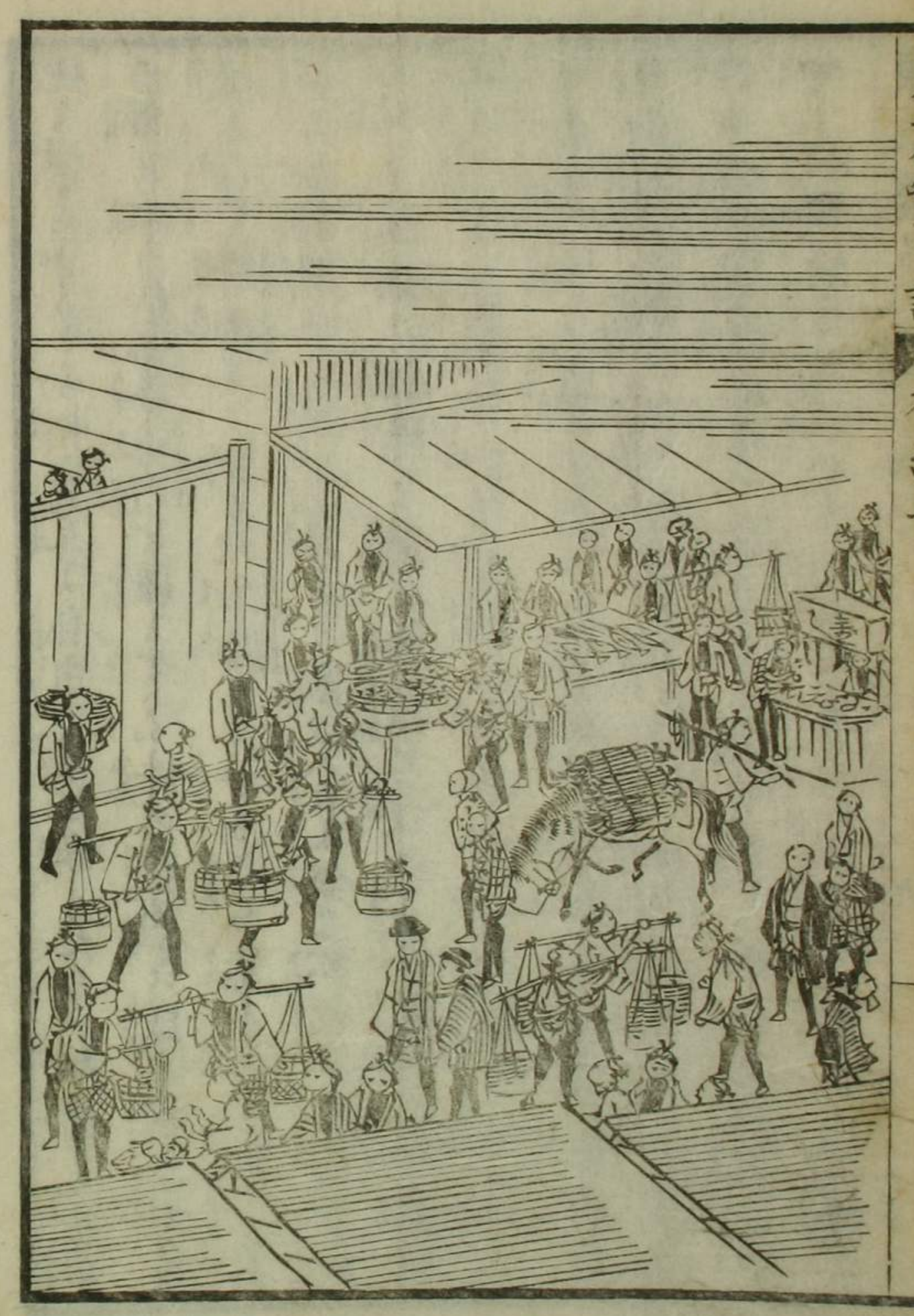
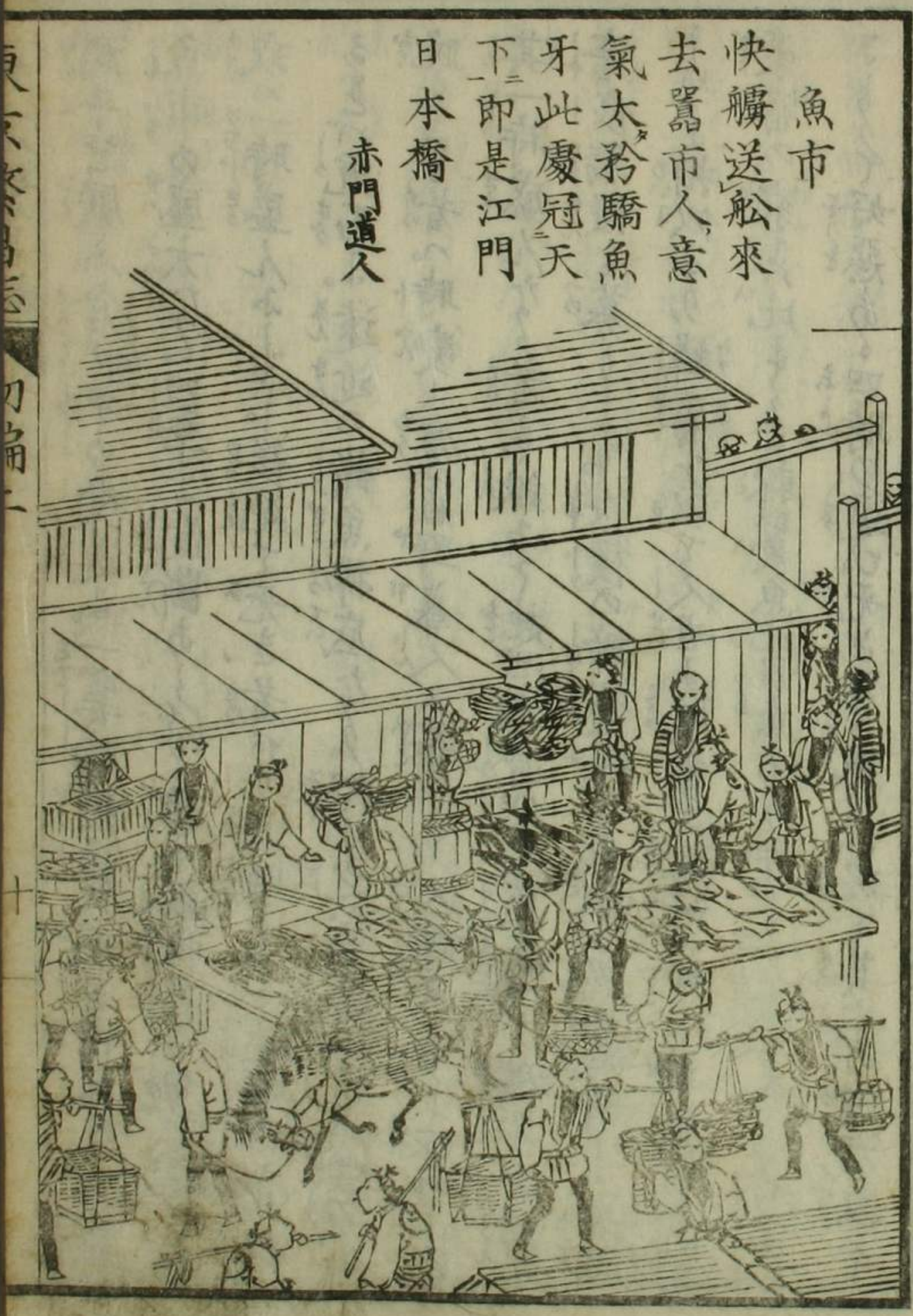


此の樽角の良材あり。水場も称する尺四面あり。尺四面の稱謂ハ削り上り
 用る所一尺四方の意なり。表は町名裏は町内云々と認りたるハ
 燈火を點むるなり。穿て硝子版を用ひたり。此よりして遠近よ。

倣々建てる町敷うらぬど或丸木或ハ尺未満ゆて右比六
多うらび當町は相隣る安針町長濱町舟町の三夕坊連接し
市場うら。總て之を魚河岸といふ。宜る哉方二町餘り魚類の
丘を築くを寸間の餘地あはば其腫氣鼻を穿て市は干係せざる
者ハ生惡心しぬまど魚買何ぞ之を知らむ所謂鮑魚の肆ハ入る
久く其臭きを聞る者あはばなり。實に此地河海の魚牙
天下は冠する殷富場往時の橋の大通室町一丁目過半は魚市延蔓して
朝々の往来不便のゆゆは午前十時間は稍終る。雖も清掃せしむ雖も
魚水を猥々復盤しぬまど路上の泥濘處處日中潮々曝干して臭氣
又人を歴も然も市人の意氣矜驕殺風景を俗としたを敢て

他は憚らざりしが相實互は自由の權を假したまふ維新より正路
の市を止られて各巷内を疆せざる。件の四箇町は成く橋の通りの
東は在て阡路より見まは。陌路あれども乃ち巷ゆりて横町あり
故も各巷朝市の間ハ正路より臨む入口は假し松板を立双ぞ板塀
の似くは修理ハ雜選を遮り。臙臙を覆ふ其体舊時公方様の
御成先なる往來を止む。假隔は異なり。余れは橋北一條の阡路
市場各早内は分併したれ。混雜昨日は百倍と。各戸連軒の
魚荷路上の板子。閑列前後を紛乱し。他目は彼是を分つべらば
押あし買入違ふ賣入置々として耳を貫く勢ハ奔濤烈火の
如し。代價現金錢扱ひも。惜氣もあらば擲てども。措幣ハ有繫は

魚市
 快艚送船來
 去器市人意
 氣太矜驕魚
 牙此慶冠天
 下即是江門
 日本橋
 赤門道人



魚市
 赤門道人

Oshika
その子

東京繁昌記 新巻上

濡手を厭ふ。倉忙中の受送。一霎時猶豫の不自由面なり。蓋
魚市の盛大なる。四季の間斷あらず。雖も鱗性自ら旬を異や。
或ハ一時盛んゆ。後絶て无き者有り。且時と一玉燭の光微
る。流石。遠近の諸魚拂底なり。俗よ之を失気と云。其旬は
晩くる者ハ時變も應や。野暮人よ等しく。人疎んば味は
其一時盛んたる者も。缺あて起せし身代。花主家が槿花の榮
奢侈驕慢も募りし。帳後の締括宜く。故は忽地瓦解。失踪
し。相似たり。鱗屬を以て人世に比ぶ。粗此の如し。世襲る高貴
豪富の家も。比まらざる。棘鬣魚比目魚あり。开も一年平る。旬不旬
よりて好悪ある。四時の違ひ无きこと能く。況て其の河海魚

孰と旬なき者あり。蓋僅の一時候。尤も盛んを称するものも。
梅花の色香と齊一する。陰曆晚歳初春の白魚蜀魂と先を争ふ。
四月上旬の初松魚。秋風烈し。且に至りて。吹送る早旨あり。白魚ハ
上品あり。松魚ハ任侠。早旨に至りて。下賤と云。就中白魚松魚ハ時
衆し。高價なれば。賤しき者ハ味ハ難し。早旨のど。初荷より裏店
各戸ハ賞味する。浩と上味ハ下嘗は通せ。民を兼ふ。下品なる。早旨
遅く及び難し。是以て推と云。國ハ功を奏する者。貴人より賤者よ
あべく。余ハ儒流國學の大先生。陳紛葉。或ハ古語。或ハ徵言。或ハ
今の世界ハ通用せぬ。舊代詞の文。鯨魚より。記聞を旨たる。吾輩草々。
雜魚學よ書く。方頭の冊子。結句通俗。世益あり。阿誰やら。

東京繁昌記 刀編二

正面へ見よ對し。高く匾額を掲ぐ。大書して電信局とあり。洋語
 所謂テレグラフ。照降晝夜を擇むことなく。茲に懸る電信線東西
 南北四維十方へ引連る地も無る。縦横稠密の屋上は機絲を
 掛る似く。疑わらる頼光も。惱める土蜘蛛の再び出づ害を為す。
 余らむ彼若菜姫の白縫が閨思君をと思ふのく昔時の赤木
 今尚土蜘蛛世に在る。已が圍を以て生糸を敷き。白縫何ぞ見雷也と
 同く趣向を覓んや。直ち箱屋の送りを連る。藝妓容易く貴人
 不咫尺せん。這當世をもて推せば。蜘蛛の田と見る者。因循乃死眼
 あらま。渡莫四天王を駭かす。大蛇丸を相敵せしむ。郭公も
 翔る。啼き童兒も。風の患とせん。因て陽曆改年の冬。東京府第

七百三十六號の御布告數十箇條中註違罪目の部は曰く。巨大の
 紙鳶を揚げ妨害と為す者云々。豫て電信線の妨を厭む。せぬ
 所なり。又只這地のまらば。煉化石屋一様なる高閣銀鋪の
 電信局。是他諸所は築造あり。就中華構なる。築地は一字。兩國橋
 の西畔は一字。淺草大悲閣前は一字。共は傳線を互引き。蓋傳信も
 一須臾も千里の外へ信を傳入。即ち傳信なるべきを。電信とい其迅速
 電光は異ぬ。然も炎歴轉鐘の究理なる。火力の送る所。電光
 名義を得る。公は。婦幼も。火も見え。以理も解らず。象无
 る。火なりといや。承知せん。之を称へ。怪々。遊光と
 せん。左も右も。便利世益一瞬十里一彈指。百里は言を達する

勢ハ放箭發炮も及び難シ況や飛禽走獸の兩翼四脚何うせん。
 惟ふ土木水金の形象ある故人咸知せども火の物は著されば象
 无き故五性中何れも有を凡夫の知らば然るを太古燧人氏ハ
 蚤く相生相尅の究理するも木を鑽り火を取より食物ヲ
 烹飪すること初めて興ると唐土廿々傳つたり吾國ハ神代に
 泥土煮沙土煮の兩尊其民を利しあふ神功あり故に這神号あり
 と聞かば烹飪の所為ハ早くわら殿后軻遇突智生まると
 母神灼き神退去是を火神と申せども以ての外なる凶子あり父神
 怒りて三段おまると御尤千万ならん三段各神と化成その一段ハ
 雷神の破落戸とや成られむ後世時々人を威し或ハ管家子

荷とを容る禁中ハ墮薛靈或ハ義平ハ副カシ難波の次郎
 を暴死す愉快あども畏しは俗の所謂惡火あて火事をこの
 本家と謂たりん傳説併し和漢とも但是相生相尅の理は棟所
 の文義の未と空氣の火を寄り尅する所の金線は言を傳ふる
 機關ありとハ神ありぬ身ハ偕指り神なる御身も知る處らば
 都洋人の究理精妙孰う驚嘆せざむ昔人田夫の拮楯を見て
 機巧を為す者ハ機變を懐くと因循固陋は歎せむ尚今の世ハ
 遇ぬハ勿心地ハ開化し電信を為す者ハ善心ありと諺語で讚
 せん人巧の奇此のごとく天工を奪ふは臻まば雷公雲間より這光景
 を見下して以為く電ハ俺部下の職下界ハ之を私して且我許可

請さくは猥に電を称する者ハ我を輕蔑するならむ。外口めむんハ有べら
らばと連轍を負て立上りし。深念を轉し等一霎時故障をりハ
甚不碎あり。免許し税を取るが。當世なりと黙算し。緯の由と天
帝は奏して獻慮を伺ハ天帝聞食し止めたまひ。汝が管轄する
所の電を下界は私するハ天を憚らぬハ似し。とも。丹を彼此と沙汰
まるとは自由の權を假まこと能ハぬ舊幣ありと譏る。も。税を
洋法の重んずる所なり。今さら厭ふはあはれ。出ま。隨
收納ハ却て汝が薄命の基。な。ら。む。と。宜。ふ。を。雷公不審再問
まら。く。税を収ハ臣等が身の没造化は成ぬと。長生ある由のゆ
からん。と。せ。ば。天帝微笑したまひ。汝知らば。下界の野語ハ

税ハ身を扶る薄命としり云々 語路あり
国立銀行并三鏡橋
新場と称する材木町の東ハ即ち各州より。千品萬種を廻送する。
日本橋つきの河より。朝夕南北の河岸地な。所謂片側町な
ま。ども。河岸ハ魚肆の納屋ありて。兩側瓦屋稠密。毎朝魚市を開
か。と。橋北ハ異あらねども。只一ヶ町あるを。市場廣き。あ。は。れ。を。
橋北四ヶ町の盛んなる。顔顔ハ為ま。は。益。這地ハ著く魚鱸ハ魚濱
より。定則あり。盛んなり。と。橋北ハ猥り。送。る。を。得。也。此。故。ハ
魚の品類自ら異なる。南北の間屋相互ハ妨と成らざる。敢て盛
衰を論むる。這地南の町稍盡。東ハ亘る一條の橋あり。舊く

海賊橋と呼ぶ。江戸砂子曰く。一名將監橋む。東橋詰。海賊
御奉行。向井將監殿の邸あり。故より云々。按ずる。向井氏の
邸あり。寛永江戸圖に見えり。其邸の地は接して。西は橋を圖
に記す。名は何とも記さず。是即ち海賊橋なる。然も橋名を
負ふ所の。海賊奉行との職名。東職記にも載せられた。必まこの倣
難し。うまは橋名の縁故たる。未だ審るる迄ども。尤も悪き稱あり
を。開運橋と改められ。寔は佳名と謂つべし。即ち開運の名
空しくらび。昔向井氏の住地なり。后は牧野豊前守侯の邸あり
在る。俗は海賊牧野と稱せり。橋の為は牧野家。忌へり。ま
名を稱へらる。今ハ邸と共に消ぬ。跡ハ國立銀行あり。國立

銀行と俗よ。為替會社の事なり。とぞ。歐羅巴莊嚴の華閣巍然
と造營あり。飛宇雲錦班駁る。如く。深遼風花繁蔚ある。とぞ。
皓壁晴曜金楹玉鳥白間碧瑣四顧内望朱雀對鐵門。左青
龍小く穿眼あり。倉琅根の柱扨も。塵埃を遮りて。翠壁清平。
華靴は有ざる者。豈之を踏得んや。周牆面背右白虎。女武ハ
之を後め。華麗整飾嚴正なる。誰う竦立し。敬せをらむ。
彼祖龍天下併御の後。昇りて。娛樂を盡せし。越王の起した。
瑯琊臺も斯や有らむ。其東海を望むごとく。死ハ屑とまべり。比
辟地窮理の村翁野奶。初之を仰望ぬ。必も跪坐して。禮拜
し。這東畔は馬頭あり。小網町へ往來す。舊く鎧の津と

文獻通考
富人者州縣之本
上下之所賴也
富人為天子
養小民云



喚を忽地舟を廢弁し。一條の梁を架り。津の舊名を搗り。龍ひ
鎧橋と之を号す。普く行客も便り也。市人も之が為り。利を得る事。
三日の奔走一日は足る。開化ハ即ち痒き所へ手の届くが如く。と
謂べ。

新富街劇場

都下四里四方地とて。稠昌せざるハ無くと雖も。別て盛場と称る者
數之所。就中劇場を以て第一とす。昔時幕府免許の地堺町ハ中村座
併し操人形座。普屋町ハ市村座。木挽街ハ河原崎座。這三ヶ所あり。多
を。天保の改革嚴苛の時。其徒非類あるを以て。咸淺草山の宿町ある。
小出信濃守侯の。別墅跡一ヶ所。引移すべき旨の。公命を蒙り。そ。

即ち壬寅天保十三年の二月三日。先堺町普屋町の両坐并し操座。少々の一
件の替地へ轉す。河原崎座ハ經營晩し。翌年九月。移轉せり。
此地を新し操若街と稱ふ。總地坪一萬七十八坪あり。其二丁目と
中村座。二丁目と市村座。三丁目を河原崎座とす。猿若と云元役者
の事也。昔俳優の稱なるあり。宇治拾遺に載る。然るを
中村座の鼻祖勘三郎。獨猿若と稱へり。後ハ竟ハ中村座の
別稱の如く。成しを。總町名之を稱へ。且二丁目ハ中村座の定礎
したる。這隊よて。冠たる由緒あるなり。今ハ當時負郭の地。
三座連接し。所謂盛場の別世界。繁昌從前ハ異らば。
帝殿后ハ操の人形座の衰廢せり。河原崎座ハ其始先座より

百萬の敵軍を退けしと云ふ張飛は似たり。斯をり這地の盛んなる。維新の天竺時を得く。人和勿論地名の利を豫て圖りて所を。何則に這地新開の其初よ。新島原と号けしもの。西京の島原よ。據る所の稱謂ふ。妓院の巷なるなり。然る昔承應の年間ハ。戯場の事を嶋原としたり。其縁由ハ當時市村座と。始て故に狂言を脚色髪切島原坂田嶋原等題号せし。連々大入なりし。芝居を呼更て島原と稱したり。此舊例を推考せし。始り妓院の為り。新島原と稱し。暗に守田座が新舞臺を開業し。新島原と。造化の小児が計ひあらむと竊し思議せし。蓋新芝居興行の地。茲新富街のとあらば。南鞘町は澤村座あり。

是名譽の且廢人澤村田之助の興也。芝埋堀は河原崎座あり。是市川家の子孫也。河原崎家の養子に成る。權之助の興也。這兩座ハ舊來の三座よ。伯仲と謂べ。又蠣殻町ハ中嶋座あり。是の近年西兩國也。村右衛門と喚做し。小芝居より興りたり。又村松町ハ喜昇座あり。是も原西兩國也。三人兄弟と喚做した。小芝居より興りたり。又本郷春木町ハ奥田座あり。是其原を知らず。或ハ云某と云ら。商賈二三名相談し。新芝居興せし。各舊時の許可ありし。矢倉を上げて盛大なる。勢以舊來の三摺と。顔顔はさ形勢なり。都文明雨露の恩。通計八座の戲場中なり。人世夏炉なる。慢戲輩。數百千人往來し。暖衣飽食自恣荒唐。

猥褻遊戯三昧なるを。毎日集合見物の數万億人一日の娯を為す
遊食怠惰數多の人氣蒸も雪の降日も堪う終る。互ひり
用ふ冬扇の當世顔なる風俗を心ある人、但し又因循先生歎息
せん。將泰平を仰ぎ奉る。浮世の男女が逸樂ある哉。這戲方今各
國あり。咸其世態人情を摸。善惡輪迴應報の幾年月を経て
後。因あり果ある理りを當一今日は盡し見まはせ。世の書讀ぬ
婦幼。懃懃を示生音あり。依て其好身事情を觀通し。己の
行狀の慎とまるとは。懃懃子曰や横文を學び過ぎて。執拗生と為
るふ勝まり。故に這技古く傳りて。今益盛か。六弥精巧をて。
彌華美なり。是其脚色は意を用う。と。流行を重んじて故実を輕ん

懃懃の條理明かならば。却て匹夫匹婦の爲に。誘導欲らむ
と。尙戲場一十日を粟一炊の娯とする。看功者あらば。眉を顰めん。
是其進む事を知りて。退く事知らざれば。竟に瀆へ墮没と。
噬臍甲斐なき時あらず。儻這班列有志の徒あらば。彼村山座
の生島をりて後車の戒とて可ならん。款蓋脚色のなからば。俳
優も亦然り。自ら王侯貴人な扮。忠臣孝子義士節婦も擬し。人
世の鑑と爲る者。羊質虎皮の原来あらず。丹を問ふ。あらねども。
小く大體の見識ありて。其身を省み行狀を慎まむ。有るべし。
俳優も是丈夫あり。余も元んば長生とて。天子對し人對し。
悚慙慙殺あらざらんや。然るを徒に驕慢し。見物の足さ引け。

花見茶書

花見茶書

花見茶書

東京雑記

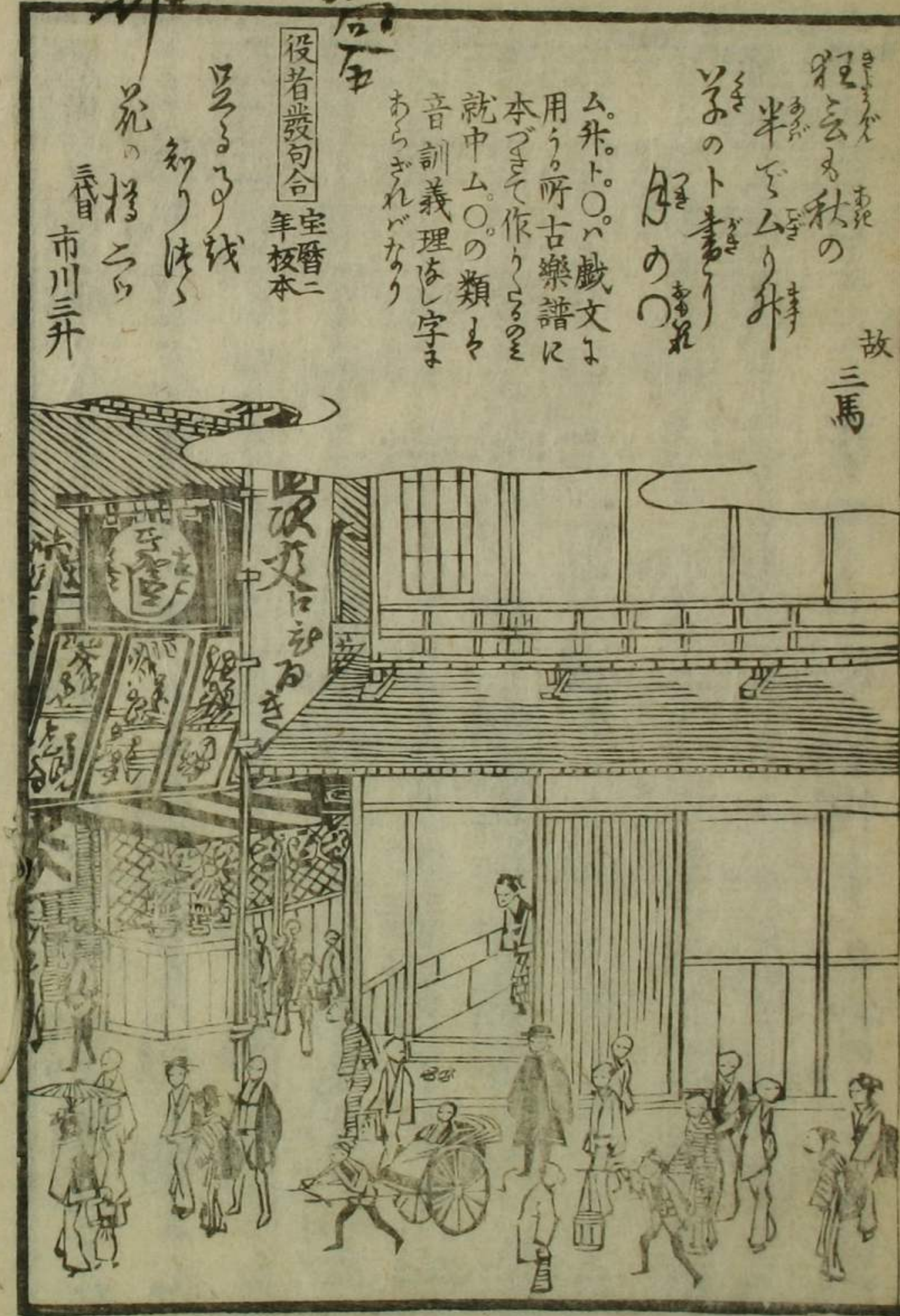
狂言も秋の
三馬

半でムリ
解の

ム。非。ト。ハ。戯文
用。の。所。古。樂。譜。に
本。ま。て。作。り。ら。る。と
就。中。ム。の。類。も
音。訓。義。理。は。字。ま
あ。ら。か。れ。ら。る。

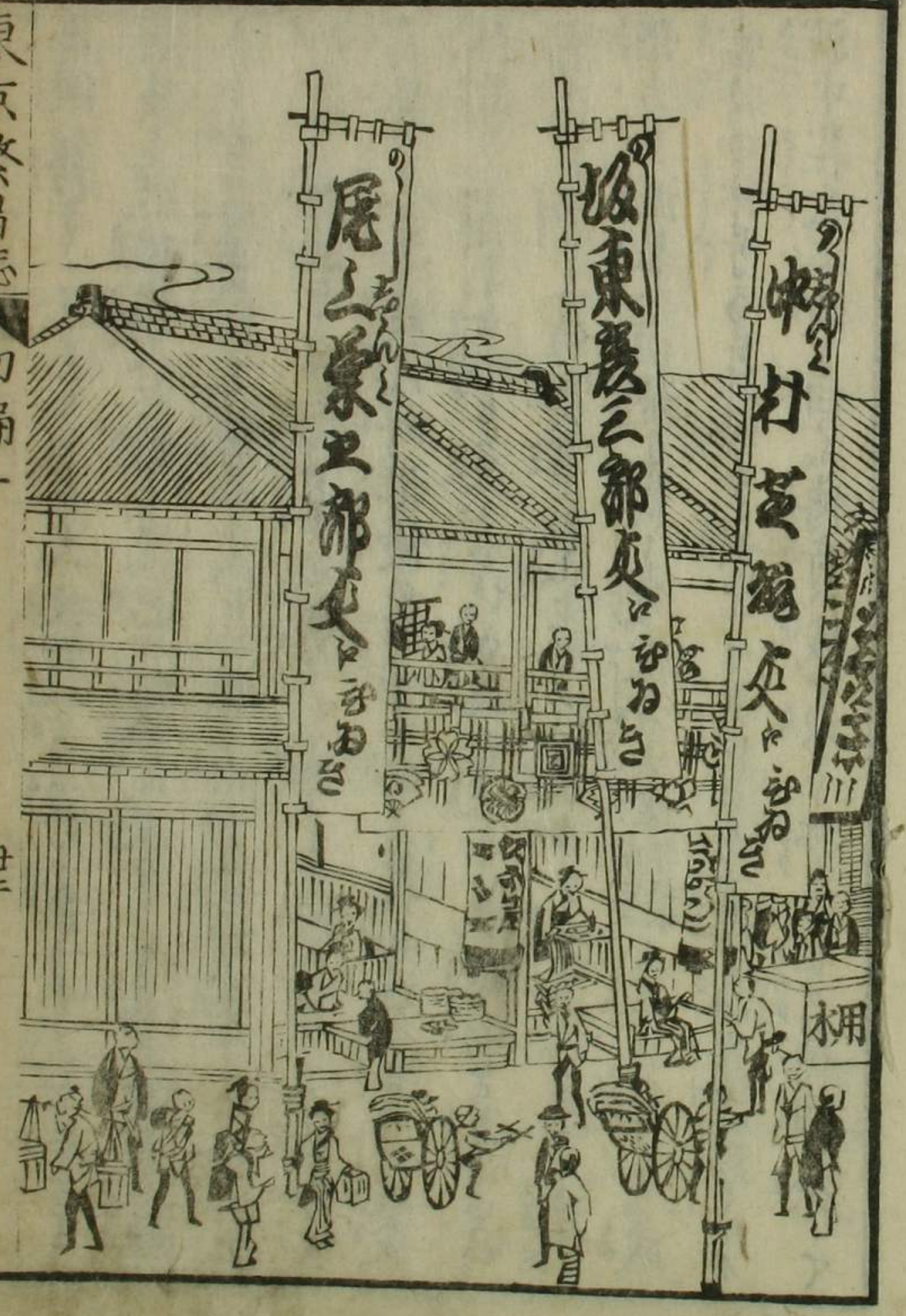
役者護句合
宝曆二
年板本

花の
市川三井



東京雑記

廿二



俳優ハ誇るゝ是よりとまらぬ。彼野干の藻を戴き人々を魅する。人々を魅する。異るるに彼偶人を魅する。已が妖術人及むと為ん歟。然も魅する者ハ庸愚のそ。神ある人を魅し得む。是俳優の故実を知らず。艷貌を以て婦女子を。飄掌と等しき所為なり。奚ぞ具眼の人氣を得ん。吁俳優の野干に等しき。和漢今昔の同敷引戲の品目。女形を且といひ。立役を末といひ。般童を且といひ。實惡を浄といひ。實事を正生といひ。濡事を小生といひ。云々。這宅猶あり。涯畧元回選に載る所。彼者大全安永三年板本。是を擧げり。咸當時の称号あるに。時を異めて異同あり。其字義諸説紛々たる。就中莊岳委談に曰く。傳奇ハ戲を以て稱し。其名轉倒を欲して

實なり。故曲ハ熱を欲し。命るよ生を以て元回選の婦ハ。夜宜し。命るよ旦を以て。開場事を始す。命るよ末を以て。塗汚不潔あり。命るよ浄を以て。堅瓠集樂記の注に曰く。俳優雜戲ハ獼猴の状の如し。乃ち知る生ハ狂あり。且狙なり。浄も浄あり。且狙あり。俳優を謂ふ。獸の如し。為る者ハ所謂子女を擾雜せしむるあり。云々。看るべし。和漢俳優の舊弊。一洗する。非ざる。文明の俳優否。既近時一花生。石見銀山を啖了。毒殺の淫婦の為。流罪の俳優あり。甚麼正生。英旦耳が疼る。ゆるゆる。市あり。理屈あり。遮莫所謂別世界。月ハ隨意に出没。忠臣藏ハ一夜の中。再出月ハ和と

舊く云へり。方今陽曆より更りて。一月の中は満月の再出こそ有りの
ころ。此後究理を徒に掛り。塵粉も磨き細くも。一夜の中は
一輪月の再出と云ふもあらじ。六花の雪は半減し。三角は降出し。
積もる忽地綿と成り。消し流し河水の布を引き板は搥割る。故は
舟より人を投込る。或は土堤より轉び墮る。水の飛走ること先
履も歩行地へ裳を曳き往來せし。敢て汚し風情非む
掃除の届く俗あり。格子が建てる有ると思ふ。即刻取拂ひ
殺害も遇ふ人。何の某と云ふ一役あり。其場は軀を暫時も
止めず。平々たる伎へ。借使幾個砍仆せし。側ら死骸が自ら
起る。背後へ其身を躲し仕る。毫も道路の妨せば思ふ

違式註違の御布告。茲も嚴き世界と見え。浩く人気が
異域より。君子國といふ異あり。其土人生平は謂らく。人間の娯樂は
食は次は是色なり。那の胤と云ふは連係らる。貧乏鬮を引當
り。造化の没きの。鄙語の居膳の箸を採らぬ男の耻。況んや
快樂を極め上。貨を貴ぶ俳優の營生。什麼生俗より好い
月日の下で生れ。果報を。昔は物喰常綺羅。一生過すか
徳あり。故に一人謂らく。君子と成り世は忘る。俳優
と為る俗人。愛せらる。如く。エモシ如何と云ふ。ヤスと
謂返され。一句もなき。舊弊論の閉口も。開化繁昌の勢ひ
なり。

因よ野凡やがをり昔むかしの俳優はいゆうより才子さいしありて今いまは美談びだんを遺のこす者もの多おほりし金作きんさく褻せつ市松いちまつの模様ようよう嶋田しまだ鬻うの類るいなりし就中しゅうちゅう市川いちがわの初代しゅだい段十郎だんじゅうらう才牛さいぎゅう大孝だいこう子の聞きこえ高たかしし二代目にだいめの相あ建けん也なり相あ襲おそて家聲けせいを振ふるひ且かつ風雅ふうがの才さいも富とみく父ちちの恩おんとらし一書いつしよを著あかし老おいの樂がくは一記録いつきらくを自みづから筆ひつして家いへを遺のこせり世よの好古こうこ家傳けだん寫しして當時たうじの考據かうきよは珍ちん藏ざう也なり其後そのちちも名代なぶだいの俳優はいゆうも俳諧はいがいの文雅ぶんがも多おほしし只ただの一個いっごうも在あらなきなり詩歌しやうかの少すくしも和漢わくわんの學がくは无なき者ものより作あし難がたく多おほくなり俳諧はいがい發句はつごは無學むがくはして作あし易やすくなり風雅ふうがなも各おの之のを嗜しゆむなり因よて假名物語かになものがたりの一部いちぶ宛あも讀よむ藝事げいじの補益ほえきとなり今いまは其その俳名はいなの遺のこる者もの尠すくくなり

古今ここん役者やくしや發句はつご合あ年ねん延えん享きやう三さんの序じよは曰いくなり享保きやうほの頃ころより諸見物しよけんぶつ役者やくしやを褒ほむなりイヨいよおららが盛府せいふの或あるハ路考ろかうの金箱かねたこなりなり譽うへたり惣そう役者やくしや比ひ皆みな表德へいとくを以もつて譽うへたりとふなりぬ云々ぬんうんうん茲こゝは表德へいとくとハ俳号はいごうを指さして云いふなり其古そのふるく傳つたへたり者もの三升さんしやう新車しんしや家橘けきち秀鶴しゆかく薪水しんすい梅幸ばいしやう是こゝるなり訥升ねつしやうも訥子ねつしより出いでたり所ところ其その宅たく猶なほあらへり近ちかくハ芝翫しせん紫若しやくわくも原もとハ俳名はいなも撰せんめりたるなり今各之いまおのづかを襲おそへり也なり其名そのなも有ある俳諧はいがい也なり嗜しゆむなり其その甚しつ麼なりぞや就中しゅうちゅう三升さんしやう新車しんしや秀鶴しゆかくハ有ある數かずも先代せんだいの雅致がぢを承うけて今いまは採毫さいごうを娛あそべり音曲おんきよくの學がくハ家業けいごふなも餘興よききやうは嗜しゆむなりといいふなり近年しんねんは至いたりなり也なり世よは加賀屋かがや歌うた右衛門ゑもんと

喚ぶ。中村梅王が。文事を好む。梅王餘興は詳なり。其後尾上菊五郎が。種藝を好む。巧みなる。其他雅吏ある者。勘くらひ。別と市川の七代目白猿ハ才子ある。奢侈を極め。つと甚し。毎夜屋中の間毎。百目掛の蠟燭を。數十燈安らむ。宛も白晝に異る。一人之を難く。如何に金錢を自由を得る。此の如き。餘りの贅る。少く。家費を省き。あべと言へ。白猿含笑。芝居ハ天下の贅物。らむ。天下の贅物を以て。業とむ。者。僅己が一家の贅を。厭ふ。その私あり。己節儉を知らざる。非む。惟も世間の人。咸節儉る。芝居ハ一日も立べらば。世間の人。

贅散財を受く。芝居の者。一同の衣食とす。尚芝居の者。一。節儉を為すと。世間の人。散財を薦め。己。之を蓄へんと計る。是。陰囊ある。者の耻す。已。世間へ對し。耻する。世間を為べけんや。と。謂。一人閉口。せ。とぞ。介。當時幕府の。頑吏等。人間の各業。世間の。萬件。景必二用ある。を知らば。玉石を混淆。白猿。奢を刑ひ。江戸を放逐。浪花の在任年を経。嘉永六年の夏六月。亞里利加の使。船内海へ始。乗。聞。時。白猿。彼地より江戸の家族へ。通信の書翰中。白の先へ。船。来る。さうな。已。居。殺。

とよ戯歌を送り。風流洒落推し知るべし。其子八代目團十郎
ゆ。藝評家名を辱しめ。殊に孝賞世に高き。惜哉後
自盡し。行ひ終始全うらねど。昔時平賀源内が七部書中の
飛ぶ噂論。人品なる。并を咎むる。是るべし。那
孝行の旌賞ありし時。難波の大儒篠崎小竹。其美行を感歎の
餘り。五言の古詩一篇を賦して。那に送り與へし。余縁由有
く之を得し。縦一尺二寸横一尺一寸三分の絹本ありて。行書
落款あり。裝潢し。家藏せり。其詩は訓點し。左に擧ぐ

團十郎

四勿有聖訓君子遠哉場豈圖俳優藝産名園十郎の

聞其孝弟美士人誰敢辱家世住江戸翁曰海老花
前年蒙嚴懲放逐出都疆宅以死類被移猿坊
哀慕雖切矣法不許相為歌舞畫賣伎淫濼杖沾裳
雇淺雖不多分款資旅裝書信教問安得報以慰孀
事孀極甘脆病刈躬茶湯而弟及姉妹愛育共同床
輯睦致和氣一家貧窮忘更有翁牙子七十餘俵々
取書終天壽費用不滲囊人或勸婚娶輒辭曰不違
心忍逆孀言非歡為不助特願翁每益佐叔不違
從翁末大坂至今四星君自改業与肉每朔新佛堂
佛堂其世祀成田不動五積誠或問里令問自捨揚

知らずと至るとも。彼と頡頏者ハ尠シ。何則貴賤賢愚老若男女
 一ヲを指シ其實を知者ハ誰也。天神と稱せバ管家と知り。大師と稱せバ
 弘法と知り。祖師と稱せバ日蓮と知り。御門跡と稱せバ一向宗の總持と知り。
 權現様と稱せバ東照宮の御事と知り。翁と稱せバ芭蕉神と知り。八代目と
 稱せバ此團十郎と。知らざる者ハあるべからズ。其徳茲ト至らん。欲せト雖由
 難くもや。斯のト凡一世の名譽。自殺ハ何ぞ惜むは足らズ。其身の
 罪愆も贖ふは足る。惟善種ハ善業有り。此家の祖團十郎ハ世々孝行の
 聞へ高。父の恩 享保十五 年板本 白翁故才牛と 初代團十郎 郎排号 吊る 辞の中曰く
 父ハ十藏法名浄喜。總州幡谷村の富農少。堀越氏ト云。然るハ十藏
 耕收の業を嫌ひて。任侠の義と重んず。中江戸ハ来りて住せり。時ハ万治三年

庚子。和泉町ヤ。才牛を生り。童名海老藏。幼より性伎藝敏。因て
 伎家ハ入。市川團十郎と稱せ。父ガ任侠の勇氣を受。荒事ト云道
 を開けり。略其至孝ハ既ハ世々知所あり。浄喜尚樂屋ト來れ。履を
 待せ迎。手と曳。棧敷ハ在。髪のももて。怠倦を問。家ハ在。出入
 必を面。日々ハ寒暖を尋ね。故ハ又他人敬。重んず。と多ク。云々
 下。此孝子家と興。八代目の孝子ト至。て家名絶。善終始あり。謂
 べ。且市川の市ハ。音訓相近。一ハ萬物の初敷あり。又其家紋。三升
 の三とも。純陽なり。ハハ陰の極敷なり。陽ハ首。陰ハ尾。天敷自然の
 理。歟。附て云古今役者大全卷の六家系。市川團十郎。本國下。市川
 村の出。何ハ誤なり。同書卷の三。伎藝園批の部。畠矢村堀越某の男

とあるを。村名の文字ハ違(ども)是(は)父(ちち)の恩(おん)の家書(けしよ)なる(に)此(こ)を(り)て(と)證(あ)せり。又(また)當(あた)世(よ)後(ご)者(しや)穿(くわ)鑿(さく)論(ろん)安(あん)永(えい)六(ろく)の市川(いちがわ)傳(でん)也(なり)。先(せん)祖(そ)才(さい)牛(ぎゅう)ハ下(げ)總(そう)三(さん)の郷(ごう)成(なり)田(でん)村(むら)市(いち)川(がわ)某(その)一(いつ)子(こ)云(い)々(々)。と誤(まち)り出(で)る(る)其(その)没(ぼつ)日(ひ)を(を)役(やく)者(しや)綱(きよう)目(め)ハ元(げん)祖(そ)市(いち)川(がわ)團(だん)十(じゅう)郎(らう)ハ元(げん)祿(ろく)十(じゅう)七(しち)年(ねん)二(に)月(げつ)十(じゅう)七(しち)日(ひ)ハ極(ごく)樂(らく)の舞(ま)臺(たい)へ行(い)き云(い)々(々)とあ(あ)ら(ら)違(ちが)つ(つ)り。父(ちち)の恩(おん)ハ門(かど)譽(よ)又(また)室(むろ)覺(かく)榮(えい)才(さい)牛(ぎゅう)元(げん)祿(ろく)十(じゅう)七(しち)年(ねん)二(に)月(げつ)十(じゅう)九(きゅう)日(ひ)とあり上(かみ)是(こゝ)方(かた)今(いま)の開(ひら)化(か)ハ晚(おそ)ま(ま)し。頗(た)る舊(ふる)談(だん)の(の)り。今(いま)日(ひ)の昔(むかし)の昨(きの)日(ひ)ま(ま)で。甲(あ)乙(おつ)ハ託(たく)し江(え)戸(ど)の花(はな)と稱(な)へる。餘(よ)花(はな)无(な)らんや。蓋(はた)し所謂(すゐ)江(え)戸(ど)の花(はな)の遺(い)香(かう)と(と)可(か)な(ら)む(む)也(なり)。

東京開化繁昌誌第初編卷之上畢

東京開化繁昌誌第初編卷之下

東京 萩原乙彦著

牛店繁昌

食(じ)色(しき)ハ人(ひと)の常(じょう)と雖(しな)い。自(ま)然(ぜん)興(きよう)廢(はい)あり。女(おんな)貌(なり)ハ古(ふる)くハ瓜(うり)實(じやく)面(めん)を貴(たか)しむ。後(のち)ハ古(ふる)今(いま)雜(まじ)の野(の)凡(ぼん)と賤(せん)む。今(いま)ハ圓(まる)素(そ)中(ちゆう)肉(にく)と稱(な)へる。介(かい)と(と)も三(さん)平(へい)一(いつ)鼻(び)の低(ひ)きを好(この)む。有(あ)る(る)べ(べ)くハ揚(や)貴(き)妃(ひ)ハ頰(ほ)紅(こう)を粧(ま)ひ。今(いま)ハ鼻(び)を扼(おさ)む。食(じ)物(ぶつ)ハ昔(むかし)時(とき)ハ陰(いん)曆(りき)四(し)月(げつ)の初(はつ)松(しょう)夷(い)喰(く)る(る)も早(はや)きを誇(こほ)り。寒(かん)後(ご)の鴨(か)三(さん)月(げつ)の比(ひ)目(め)魚(ぎよ)咸(みな)其(その)旬(じゆん)ハ晚(おそ)ま(ま)し。賤(せん)む。當(あた)時(とき)咬(くは)ハ穢(けが)れを帶(おび)て三(さん)日(ひ)神(かみ)社(やしろ)を拜(を)さ。謂(い)習(じゆ)ハ山(やま)鯨(けい)也(なり)。僧(そう)家(け)ハ所(しよ)謂(い)般(ぱん)若(じやく)湯(たう)水(すい)校(がう)花(はな)の類(るい)也(なり)。一(いち)時(とき)遁(とん)辭(じ)の異(い)稱(せう)ナリ。舊(きゆう)弊(へい)ハ今(いま)用(よう)な(な)く。障(しょう)子(し)ハ紅(こう)葉(え)乃(なり)吹(ふ)寄(よ)を。

吹散たる開化の光景。所陌街衢軒を比ぶ。西洋造作の玻璃窓一々。押立たる大簇一流朱を以て牛肉と大字を書。上は官許と分書せり。天籟は舞臺と翻纏る。傍は兵庫女牛有り。と書せ。招牌を別は掛。屠牛の太股と軒は釣。鶏は裂せぬ英語。所謂ケースナイフを。明光々と閃く。客を俟骨の傍隈は累々とし。烹未醬の瓶は満り。水晶管の白きと青。蠻鶏家鴨を喰者ハ未開化と賤しむ。或は養生亭と号し。諸君是より入の門は網簾は物めり。題して。竊は猪豕を蓄るるも可笑。席上は食卓倚子の設け。却る市松の席薦を敷き。方一尺二三寸の箱は。今戸焼の土火鉢を安て。鏡鍋の軟柔煮正面の壁は貼指。数色の割烹を書。曰。焼き焼るべ焼。王子焼。まほ焼。きみ煮。つけ等なり。又別紙あり。曰。牛肉

一斤三斗。金二朱。二百文より。金二分。朱中。云。此のどく。價の違ふ。諸国各産の牛品。性味自ら異り。上中下の數種あり。抑牛價の異同あり。兵庫牛は牝一頭。三十四五圓より。四十圓乃至五六十圓あり。牝一頭。二十圓より。廿四五圓。卅四五圓。止るべし。奥羽の間會津。栗原。津輕の牛。出雲。大原。仁田。飯名の牛。牝一頭。三四十圓。粉頭。廿四五圓。其他。信州。高井。小縣の牛。甲州。八代。巨摩の牛。大抵。奥産と同價なり。中國の産も亦異同あり。豆州。田方。那賀の牛。至て下品あり。故に牝十圓より。十三圓。牡五圓より。七八圓。是土地狭小。隨て。其物も又小なり。加ふるは多。其形。朝夕石を積出。苦を喫。勞堪む。羸瘦骨立。たゞ。大約。斯なる耳。乳牛は此限。あらば。嘗て。聞く。横濱。横須賀。り。

牛を解くこと一頭は八四五頭九十頭其内小半は東京へ運輸する處あり。又東京中を解く者一日十五六頭ありと云。吁此物人世は功ありと大あり。田業之ガ力を借らむ。農夫豈堪べんや。其命を断て又人を養ふに至りては。百薬は超過せり。倘其肉旨らば其性補益あらば人の咸仁あり猥り。殺を好むはあらぬ。那生涯を安んぜん。慙は美味補益の性あり故は其軀を死せし能ある人の人の為は役せらるる。齊一して彼龜の智を以て自ら害する異あらば又慙む堪ざれば。要るは人の喰でも止らん。古は俳句は「生んて殺まはらるる茶喰」と云の國語は道なり。唯食憂を忘るべし。如何を見ても百年は足らぬ命を養ふ身の喰は損多し。喰のガ開化。故に方今解牛の官許の場所あり。其中は浅草田畝を相臨る。舊の加藤侯

の邸跡廻ち改牛局あり。牽來ぬる牛繫ぐ牛。毎日幾許頭ありけむ。陸續として盛んあり。蓋天子も故あり。牛を解ふと聞え。舊制未開の時ゆへ。今是太平の徳澤。我輩三錢を投むれば。一鍋を得るに至る。十字街鬻の煮肉ハ一串僅文久二孔廉價此の如くあらば。貧生終身牛肉の味を知ること能はむ。人力車の夜寒を凌ぐ。便る地を失ふ。按摩針ハ霜を踏む。杖の力も衰へ。既云往昔ハ高位貴人あらざれば。食料は成難し。僥倖は生じ。幸福ある牛馬は劣る身を保く。飽まで啖ふ牛肉の味を深く止らぬ。饕餮の食多かり。各處雜運せざる。和洋介はとも大く。中品以下。實位威ありて。猛らぬ上品に至り。稀あり。和洋駁雜の蝙蝠人刈む。散髪ハ問ひても知る。火丁ハ偏祖の大胡坐

背と半體二の腕の繡身を露したる。違式の罪は七十五錢召上らるる
を恐るぬ面色。俠勇う黙子う解せぬとも。頻りに強がる舊弊ありて魯提
轄くと怪しまる。然も遺肉の荷葉よあてで。揮は包まらり。是此揮といつべ
本邦の二産物四時絶るとあらば。又破と易うらば。兩要有益の便品ある
を。件の火丁撃て。帰る足元踉々踏々。介れども醉客本性爽へも。門を出
る。遊激し遇を承知て。容る片肌の跟見をくらよあらぬとも。廊を奔走く
蒼頭が。お浮雲ひりまは。へい有難うの空挨拶を。いの間もあらば。又別よ入来
客の好を問ひ。生肉一枚よ烹未。將澤山と聲高。中々喚り。時彼方の客が
今一合極熱爛。頼むとら。此方あひ又替りの鍋飯も急いで。二人前といふ
側より。今一客が。葱白を別よ一人前といふ。後あ。三人一座爰の勘定の

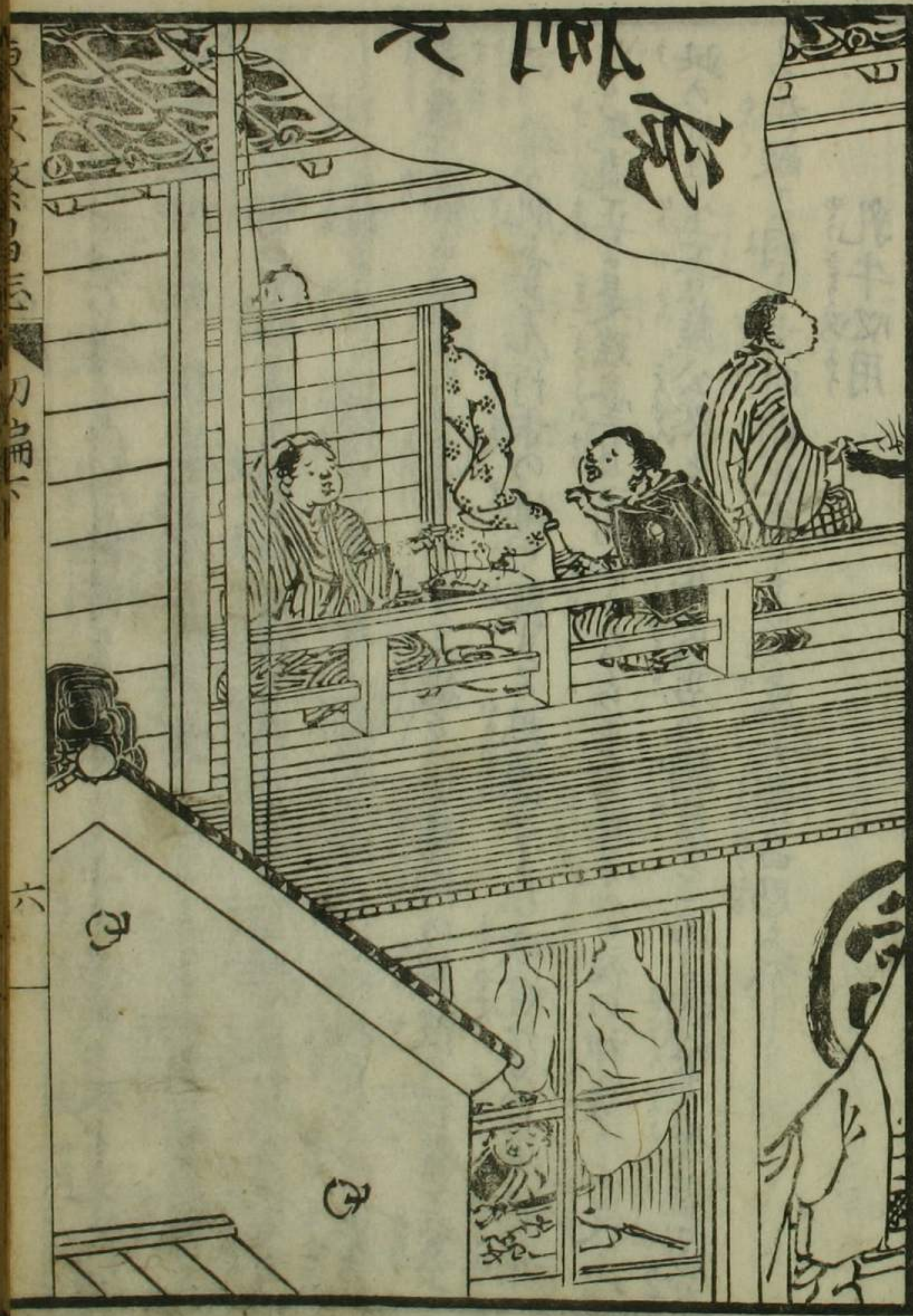
幾許も成ると云つ。霞袖衣の躲より。蝦蟇口を採出。がから附を
見せなと催促も。蒼頭の帝連々。唯有難うみりまは。唯承知ま。こと
いつ。那此奔走も。紛冗暇な。りけり。任心。は。烹爰の薰臭。の屋中。は。充満
。衣服。は。傳氣を留め。なん。好憎。萬事。人同。ど。ら。は。味。ふ。所。も。又。然。り。
和ら。り。き。を。好。む。者。へ。半。熟。を。食。ひ。未。熟。味。兒。の。過。煮。く。硬。き。を。欲。む。葱。白
を。五。分。と。称。ま。ら。る。雁。鍋。は。治。習。し。副。味。は。山。椒。の。辛。香。を。借。り。誰。う。知。ら。む
玉。衡。星。の。精。も。澆。季。の。凡。下。は。佞。媚。し。牽。牛。を。薦。り。人。を。款。待。ん。と。へ
紅。生。の。冷。し。醋。味。噌。を。以。て。し。鍋。裏。の。熱。し。膩。と。以。て。し。野。語。よ。の。十。人。寄
と。は。十。色。は。異。り。千。客。萬。態。官。員。の。戎。服。は。威。を。示。し。脱。した。帽子。側。よ
扈。從。も。僧。侶。の。神。官。と。合。併。ま。れ。ど。も。兩。部。習。合。とい。ふ。を。得。て。祇。肉。食。妻。帯

公然これを此の妙法散蓮華の京液とどふく欲るとは。膝へ垂しと
南無三寶典當の直段が下ろろ。と結城紬の藍方の此酒落過た僧衣
あるは。是が開化の思アボキア。ベイロキ能ある鷹鳥らで。躲さば錢は生凡と
剥く貯へ布施さ。兎や角や失へ。是成舊來の陋習ある。具括の
暗き地を廢し。香縫の明る道を得れば。帳尻の合ぬも理りなり。那が
道とる所陽を捨て陰を取。其行ひは反も耳。一坐はまればも神官
とい。陰陽反復の違ひあり。蒼頭呼し手を拍も。我の顔なる振動拜。嘘や
ムらぬ本地の沙汰も。廢させらるる。唯一神道牛頭天王の號号を廢
させられ。愉快あり。牛を喰ふは憚らぬを。神もトウカニ笑たすへ。
然ども價が高天の原への顔の憶が原あれ。存外天の安川あるは。屢

喰もども勘定の楮幣あるは。扱ひぬえ。開き受地子の御賽錢。
或の配當の御札料。或の神事は假託。有信無信を問。及を。那方此方
の集め錢。集め見む。楮幣も成。此上もなき。株元の原来神道一黙の。
邪曲あらぬ正直高法。綱簾も換も華表を以て。嗚呼俗口より。つら。
貨は貨を生とやらむ。將神が楮幣を生るな。件の神佛混淆の。一坐
の中。袖より合。農自ら質朴あり。工の渾く頑殺あり。商家の華族
衆貫屬と肩を比べ。毫も譲らば。文墨先生音曲家。盛衰興廢文有
て。其状情異る。評判記あるは。あらねど。事長も。姑く措て。後編
小著まへ。但し婦女子の氏あり。玉輿も。古に壁言。今に廢らば。
既し男の氏あり。味噌漉提る者多。殊に都下の女態。は。貴賤

OBABA

わき
たゞ
イヤ



車
う
シテ
シヤ
省
了
午
浮



江
似
美
美

美



東京
神

を問をば妍娘と擇まば帝粧飾を事として音曲淫戲の技を先はし
中饋縫績の要と後ゆも是其身の思意を出るは非也兩親教え導く
こと此の如きを俗とせり故は倍奢侈も耽娼靡の陋醜を極れども他も可
し自らも耻む首は瑇瑁を戴き身は綾羅を纏ひ紅粉梅花を欺き艶声
黄麗を麗と采々たる蓮華の歩み織々たる楊柳の腰彼の輕羅を其ふ
詩誰が肌をそん行末の俳句孰も想像さむ妖嬈たる王次女嬌媚
たる風流正は是瑤臺月下の仙女ならむは蓬萊宮裡の神媛と疑ふ
此の如き生菩薩公然として牛肉店の綢簾を潜る内心甚麼益如夜
も相敵は因る文明開化爰あり盛大繁昌思ふべし

乳牛必用

西洋商法は二様あり必用といひ景用と稱す其必用と天下の要道缺
べらざる品類を以て其景用といふ恭平の餘澤は出る所なり贅は物件を
目する乳牛は是必用中尤も至大と謂べき物あり本邦此産乏し
洋人も頻りに賞て此の如き純粋の物各國は多からばとて帝惜む
らく(舎密製造の術は未だ精くは如之本土の牛は雛牛を養ひ置
て先乳の孔を開通し右は人の手を以てせ如此せざるを齎せぬる洋牛は
あららば舊來人の手よりて習ひ性とありて雛牛を用らる及ん
況る其乳の多きと一斗朝夕は絞搾して一斗四五升より二斗に至る者
あり和牛は最上の者と雖も一斗漸くよして二斗五六斗或は三斗三斗
止る故は一頭の價も五六十圓より七八十圓止る耳米利堅より舶來の

者へ頭頭の價五六百圓より七八百圓殆ど千金一庶とぞ盛んたるを
 何物も及まん。兎のよき一時の流行所謂景用贅たるべき物預り知るべき
 事あり非む。曠野に牧を興設されが運動宜くして不毛の土を勿心然と
 必用の要地と成さむ。コンシスウツミルク 乳の賦ミルクウエル煉 乳の粉 乳の最
 等の四品製造のよき各國の人員誰り貴重せざるべき。本部の人由亦服用する
 者漸多かり開化の著明き所ありて繁昌無極の勢ひと謂べ。開港後
 天子の白牛有てあり。乳牛社數十ヶ所遠近に開業せり。夫牛は數種ありて
 南牛を牒といひ北牛を捺といひ絶色を儀といひ黒を瑜といひ。和名麻しろ
 糞といひ赤を粹といひ。俗よみ駁を細といひ五歳あるを粉といひ六歳を構と云
 凡牛畜は在る土は屬し。卦は在る坤は屬し。緩ゆるて和其性順あり。陽を

午といひ陰を牛といひ馬の蹄の圓きへ陽形なり。牛の蹄の方なる陰形なり。
 其圻ころ陰中の伏陽と形をのり。馬病と死の臥也。陰勝なる。牛の病
 と死の立つ陽勝なる。馬起ると死の前足を先あり。臥ると死の後足を
 先あり。陽は従ふなり。牛起ると死の後足を先あり。臥ると死の前足を
 先あり。陰は従ふなり。馬の齒の上下あり。陽の全きなり。牛の齒の下の
 ありて上る。陰の缺たるあり。其齒を察して其年を知る。三歳二齒四歳
 へ四齒五歳へ六齒六歳已上毎年背骨一節と接ぐ。耳聾と聞くは鼻と
 以て腫の堅なる。草を嚼て復吐き復喰ふ之を齧といひ。和名三齡再三はて
 咽喉を送下する物須臾ふして又吐露也。故未だ消化せざるを聖蓋と
 号して藥材とす。角は漁師以て鯉を釣る。東海多く之を用う。又煮て瑇瑁を

偽り。蹄へ蠶甲を敷き。皮へ太鞞を張べし。又雪踏を作るべし。古皮へ阿膠を
作り。脂へ蠟燭を作り。骨へ厘等の衡と作る。斯むより多用の其上は乳の
國用だ。幾何ぞや人と類ひ病を醫む。何れぞ舎密と云ふ。雖も盛大なる
隨く。國益實に尠く。彼は妻臥病床。兒呼餒を救ひ。妾と側は
して。妾は賢の虚を補ひ。以て子無き者も之が為し。子を得るの幸有
く。孝を祖先に失つ。子孫立竹の功を遺して。人民繁殖され。繁昌の
基。國土の恩を報ふに至る。開化の御徳仰せらるべし。

娼妓解放

西洋より自由の權と廣く衆庶に布せたまふ。文明の御徳政普天の下
率土の濱届る。隈もなく。既し壬申の冬に至り。諸國各地の妓院

驛舎に抱置る。年期の遊女併し藝妓の徒と成解放の。御沙汰あり。
桂玉の地の猶さ。籠の鳥も恨めし。啣たる長少數十方口一時自由
の飛揚を得。東西南北四里四方。朱引内外地。新道裏家の
隅々まで。縁なき者在り。迎ひは出る親も。歸り来りける。
娘あり。或は姉妹。或は姪。或は遠縁未見あり。鯛者。鍋道端の狗の
糞を撰む。及む。彼の陽炎の有無。縁は擦む。小雄鹿の絲は
よる。ちり曳るあり。雑襲湧がどなり。之が為は場末。錢湯邊
も。罵々とし。斬髮店も喜々たり。汗籠鳥の女子。此。聖代に在り。て
得難く。も又得難く。其身の元來其親兄弟の歡喜。怎生をうり
なりけん。所謂手の舞足の踏む所を知らぬ。理りたり。然もま

借錢の淵に沈む。元介の山を為す者。新々鑿札を戴て貸坐敷。屋に赴き。猶娼を嚮ぐを。免許さうと聞えらる。其恩澤及せり。極り。藝妓も亦一般。管異なる所。公然。閨房に入らむ情を賣。三絃の糸線香の烟細き活計。親子糊口。際よくハ王輿に乗。を窺ふの。其鑿札左に抄出。

面表

第何大區何小區
何町何番地

○藝妓

某

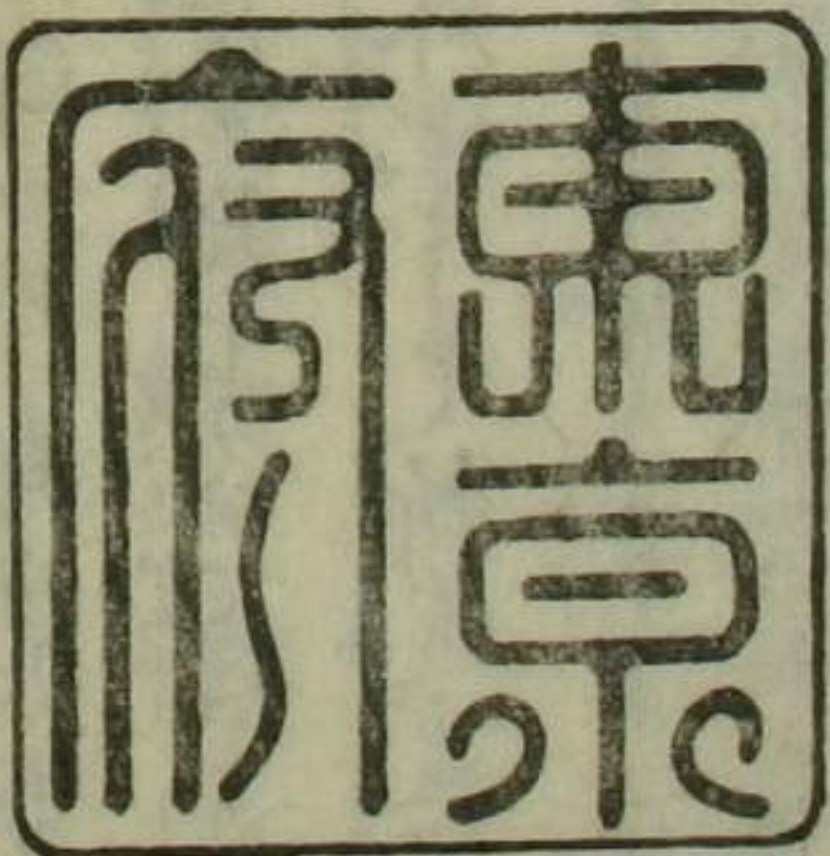
何年何月

第何々号

面裏

壬申

十月



巾一寸八分長さ二寸五分。板の厚み二分をうなり。是藝妓と連與る所の。一ヶ月税額金三圓の定則なり。各札御府印の焼字也。

第何大區何小區

何町何番地

何之誰何

面表

娼妓

某

何年何月

第々号

裏 明治六年

面 十二月



是遊女と連與る所の。寸法藝妓の札と同。一ヶ月税額金三圓の定則也。這制支那より古くあり。宋末に臘粉錢と名是あり。件の鑿札を受る者。各自は是と甘んぶる。有べらる。自ら願。野單と思ひ。負賤と會ふもの。

ある歟其實情の知量難。蓋抱の窮屈を脱ぎ。娼妓藝妓の輩が雀躍
 怡悦よ地と異て其主人門の啓言よ。鳩よ油揚攫る。心地せれ。當惑あん
 就中春夏秋冬有別天と吟する。北郭不夜城も其後の空郭寂靜たる光景
 あり。名たる金瓶伊勢六の五階造の依然これをも。遠見せれ。佃嶋の灰小屋よ
 異る。び。小もとも又勉強して新。趣向と思ひ起。件の西閣のそある。各
 各樓西洋燈の照版舟。光輝四方を燦爛。或は浴室の清潔ある。割京の手
 と尽して客を招んとを計る。是即ち貸坐敷の免許を蒙り奉る。其堅札
 左の如し

表

貸坐敷

第何大區何小區
 何町
 何番地所

面

渡世

何ノ誰

裏

第何十何号

面

東京府



明治六年十二月

是貸坐敷渡世の者へ通與^{とら}所^{ところ}の^あ巾^{きん}寸三分長^あ寸四分板^{いた}の厚^あみ三分五厘を^うり^へ。一ヶ月税額金五圓の定則^{ていそく}是以^{こゝ}公^{こう}然^{ぜん}。御免^{ごめん}の女郎屋^{ぢやうらや}同様^{どうよう}あれども抱^{かか}えの娼妓^{ぢやうぎ}有^あり。嫖客^{びやうかく}の目的^{めく}。鑿^{えん}札^さ免許^{めんきょ}の出稼^{でせ}遊女^{ぢやうにょ}其^{その}身^みの姿^{すがた}髪^{かみ}髻^{むす}たる。那^{あの}青柳^{せいりゅう}の彼此^{たつち}。尻^{しり}の居^ゐらぬ隨意^{じゆい}あれを。今宵^{こんしやう}此方^{こゝ}の花^{はな}あり。翌^{あした}日^ひ彼方^{あつち}の樓上^{ろうじやう}。咲^さく。萍^{へい}は異^いる。所^{ところ}定めぬ景色^{けしき}なる。貸坐敷^{かざしき}の網^の廉^{れん}を掛^かる。業^{ごう}迎^{むか}へ又^{また}定^{さだ}め難^{がた}。別^{べつ}は高^{たか}法^{ぽう}を兼^か開^{ひら}き。左^{ひだり}角^{かく}もして活計^{かつけい}の便^{べん}宜^ぎを得^えんと願^{ねが}ふ。是^{これ}將^{まさ}舊^{ふる}く御免^{ごめん}の場^ば。稱^{なづ}へ来^きり妓院^{ぎいん}の主人^{しゆじん}。各^{おの}家^か業^{ごう}の起^{おこ}本^{ほん}と忘^{わす}れ。賤^{せん}き。營^{えい}生^{せい}を願^{ねが}ふ。奢^{しや}侈^ち驕^{けう}慢^{まん}は増^{ぞう}長^{ちやう}。朝^あ夕^{ゆふ}の動^{うご}止^と專^{せん}貴^き人^{にん}の所^{ところ}致^{いた}りて。滿^{まん}を缺^{けつ}る十五^{じふご}夜^やの月^{つき}夜^やを^をりと思^{おも}ひ。故^{ゆゑ}。前^{ぜん}代^{だい}未^な曾^{ぞう}有^うの大^{だい}變^{へん}事^じ。維^い新^{しん}以^い還^{えん}第^{だい}一^{いつ}兵^{へい}化^か

時^{とき}は遭^あふなる。抑^{おさ}新^{しん}吉原^{きちげん}一^{いつ}郭^{かく}。遊^{あそ}女^{にょ}免^{めん}許^{きょ}の地^ちと定^{さだ}まり。明^{めい}曆^{りき}三^{さん}年^{ねん}の事^{こと}なり。其^{その}以^い前^{ぜん}江^え戸^こ市^し中^{ちゆう}。諸^{しよ}所^{じよ}三^{さん}三^{さん}軒^{けん}づ散^{さん}在^{ざい}。中^{ちゆう}は今^{いま}の麴^ま町^{まち}八^{はち}自^じ及^{およ}び鎌^{かま}倉^{くら}河^か岸^{がん}又^{また}常^{じやう}磐^{ばん}橋^{きよ}。古^こ名^なの辺^へ道^{みち}三^{さん}河^か岸^{がん}の通^{とほ}り。古^こ名^な三^{さん}所^{じよ}は十八^{じふはち}九^く戸^こ。軒^{けん}を並^{なら}べたる遊^{あそ}女^{にょ}屋^やあり。這^{こゝ}輩^{ぱい}咸^{みな}當^{あた}地^ち。追^お々^づ繁^{はん}昌^{ちやう}あり。よ。京^{きやう}師^しの六^{ろく}条^{じやう}伏^{ふく}見^{けん}の夷^い町^{まち}奈^な良^らの木^き辻^{つじ}駿^{しゆん}府^ふの弥^や勒^{りく}町^{まち}あり。妓^ぎ院^{いん}あり。移^{うつ}轉^{てん}して住^すまあり。當^{たう}時^じ庄^{じやう}司^し甚^し右^う門^{もん}と喚^わ做^さ者^{しや}。傾^か城^{じやう}町^{まち}一^{いつ}ヶ所^{じよ}を申^{まを}請^こみ慶^{けい}長^{ちやう}十七^{じふしち}年^{ねん}。遂^すは公^{こう}命^{めい}を得^え。青^{あお}屋^や坊^{ぼく}の下^{した}あり。二^に丁^{てい}四^し方^{ぽう}の沼^{ぬま}地^ちを賜^{たま}ふ。葭^や茅^{ぼう}の生^な茂^{さか}りたるを刈^{かり}て。沼^{ぬま}を埋^うめ。地^ち形^{けい}を築^{つく}立^たて。故^{ゆゑ}葭^や原^{げん}と号^{なづ}け。後^{のち}は士^し呂^{りよ}の好^{こう}字^じを改^{あら}め。今^{いま}の高^{たか}砂^さ坊^{ぼく}難^{なん}波^は坊^{ぼく}住^す吉^{きち}坊^{ぼく}の地^ちあり。大^{だい}門^{もん}通^{とほ}り。其^{その}舊^{ふる}跡^{あと}あり。聞^き傳^{でん}へ。婦^ふ女^{にょ}子^こも知^しる。介^かね諸^{しよ}所^{じよ}は散^{さん}在^{ざい}

夫木集 後京極撰政

誰とみく

よせてハ

うくる

あそ枕

うたてる

毎の

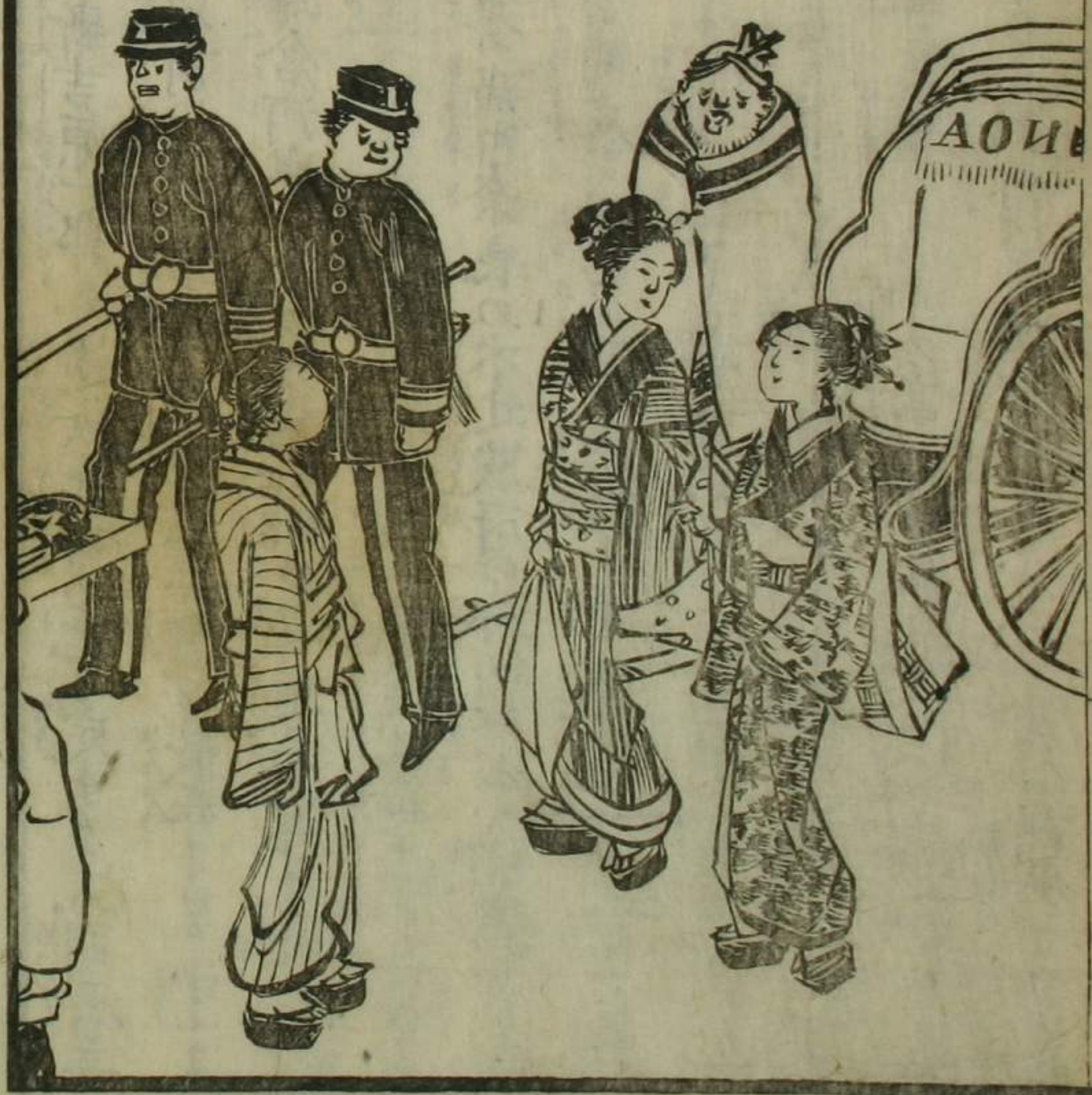
後

麥林句集

洋やう船

乙由

向ふの岸は



むら一紙前三國の

遊女名石川のやよ

あちこちと

尻あちつゝの娘

柳う舞

雅庭醉狂集

以徳むとりのあ

一姉よと味のあ

ひくまのあまの

あまのあまの

白玉翁



した。妓院との悉く件の葭原も集りて倍繁昌たり。明歴三年の
 大火後、今の地へ場所替を命ぜり。這處も亦荒地ありれば元地の五割
 増少。二町三所の場所、東西京間百三十五間、南北京間百八十間、惣坪數
 二万七千六百七十七坪の地を賜り、引料とて金二万五百兩與へらせければ、
 當時小間一間、金十四兩ありしは成ぬとぞ。今や六十七十圓以上ありて、
 恩徳感戴想像べし。其以前官よりて遊女町の規則あり、其條目中は曰く

- 一 傾城之衣類惣縫金銀之摺箔等一切着申間敷候何地ても
 紺屋深相用可申候
- 一 傾城町家作普請等美麗不可致町役等江戸町々之
 格式通急度相勤可申候事

右載て對扇あり。遊女の衣裳妓院の家作美麗停止斯のどし。質素の
 起本爰より。既慶長五年の秋關原御雷動の時甚右門其頃を
 甚内と云らる。鈴が森八幡宮の前。新茶店を構へ甲斐々々し
 遊女八人を撰り赤手拭を戴き赤前岳とさせり。茶店に並置
 御供奉御同勢の御方々へ御茶を上り云。載り洞房語園本
 あり。輕賤の舉止想ふ。是なん後ハ客は對て禮儀も演ぬ驕
 慢たる。オイランの始なり。浩り一程は幾久しき。太平の奢侈流弊も
 妓院も娼妓も賤しうけける。身の上を顧みず。別世界と自ら許して
 法外の所致あり。昨日今日の事も非也。明和五年の印本を閑居
 放言は北里の歌なり。當時の光景を知るは足れ。乃ち左に更抄也

北里從移負郭村至今尚稱新葦原四面隔溝崇墻
繞柳巷花街列娼門行人冶容極佳麗左顧右盼連
香袂比屋縱橫如碁交飛甍迢遞似邱第畫棟彫梁
鬱參差錦障朱簾向晚披銀燭爛燦夾路照合歡牕
裏坐胡姬胡姬三千齊會態綽約爭媚絕世姿鴉黃
兼學梅花額青蛾巧画遠山眉璫瑁簪插雲鬟出珊
瑚佩接珠履垂秋月映琅玕落春花香襲翡翠帷
綺席瓊筵相顧語彈罷三絃夜半時通莊猶響二更
鼓總無人怪月當午滅燈徹茵當爐牀戶外無人初
扃戶別有小堂對佳賓各自相迎買笑人金花美酒

銀絲繪百味八珍滿盤新艷舞嬌歌寧醉為君宛
轉偏委身遨遊多少少年子一擲千金不說貧繁華
綿連百餘歲珠玉為食桂為薪却利日興万錢費了
嚙蒼頭亦吐氣絨書百万煙花文定知斯地紙價貴
長堤肩輿自東西三谷川繫扁舟齊被眼還欲十日
視携手徇翔桃李蹊但期四時長夜飲忘歸蕩子醉
如泥杯盤狼藉無餘瀝唯有蘭燈照畫壁窈窕同房
閒無音就寢人疑逃禪寂雲母屏中鴛鴦衾堆來底
際月影深嫣然私語誰知者和鳴鳳凰相求心幾視
他方人間世不信來滄變古今君不見芒々宇宙盈

虚理古往今来無窮已。將相之門高賈家。万福圓滿
千禍倚。下畧

當時既此の如く況や維新の際に至りて高貴の館も未だ建ざらぬ
歐羅巴製の大度重閣を築造し娼妓も亦綾羅の上より七宝を粧飾し
天にも心とび世をも憚らば實は亡八顯然なりて天豈憎むべきや
自ら獨の自由の權を一夕に奪はれ抱へ置くる遊女も證文を乞ふも
傲然と天へ颺けられ人所謂盈虚の理也。亢龍の悔とも甲斐多し又遊女
とも思ひ設けぬ自由の權を授られし結句貧家は立たず初めし世間と
見ふ蒲團のころも引足らぬ損料蒲團の栢餅は辛く霜夜を凌ぐ
も有る其班總々三千餘り四方隅へ散乱し此処は出現彼所は陰翳を

竊は信宿の蒙汗藥を用ひ或は肉饅頭を強る形勢水許の天罡星
魔碇を奔て人間に再生するは十一大區は蔓延たる手のある上は
阿紫不來由斷大敵おそろ肝心世の少年輩この時は眉を唾を塗る咒
を怠らば浮雲きこぬり念も名妓と稱へらるる金瓶樓の四天王
平泉の若縁稻本の小稻久喜五の唐土角海老の大井其は何樓の某彼樓
の誰が如き高評ありし名妓の解放の御仁諭を克辨解奉戴し有繫は其
身の獨を慎み彼神龍の尾を見せぬ其後何所在を問ふも之を知者數
贅言まらば瀟湘今紫小太夫盛咲を世に金瓶樓の四天王と
稱せり是一時盛鬻の目の非ざるより一年郭辺の貧民廣く
米錢を施行す天賞を蒙りたる美事あり男女と雖も平凡なる

又び難る。女丈夫あり。昔も郭内は四天王と称し者あり。寫本
 洞房語園曰く其頃。寛文延宝。藝芸の上より名を取らん。京町高嶋
 屋の勝山新町建出の井筒角町高砂屋の斯藻同町方字屋
 の朝妻是を唄の四天王と云をせり。云々。當時流行り。朗細節を
 能く唄ひ者なぐべし。弄齋節。今の歌澤節の類あり。同ト
 四天王の称あるも昔ハ藝事ありて風流なり。又一趣の思渴ありて
 長生も一刺千金を擲つて足ぬ。と思ふのふと。今ハ帝
 前後は称へ。四天王も口碑は遺る。談柄の。這形勢あり。年
 過るべ見る。王難と名妓の次女を後世何と評せん。近時東
 京傳が意匠は出らる。奇妙圖彙ハ。享和三
 年坂本

をいらん

おいらんの本字はまご
 つをらなう。後年中ま
 わるびはならされ。ハ
 老るもかをさふはあ
 老形とあくは
 昔ハおのくかと云
 享傳の比あり。
 虎の匂よ
 おいらんののつち
 よく暖極うれ

此のいさも後年の。
 童子は着つて不審で。
 何の事とも解し得ぬあり。

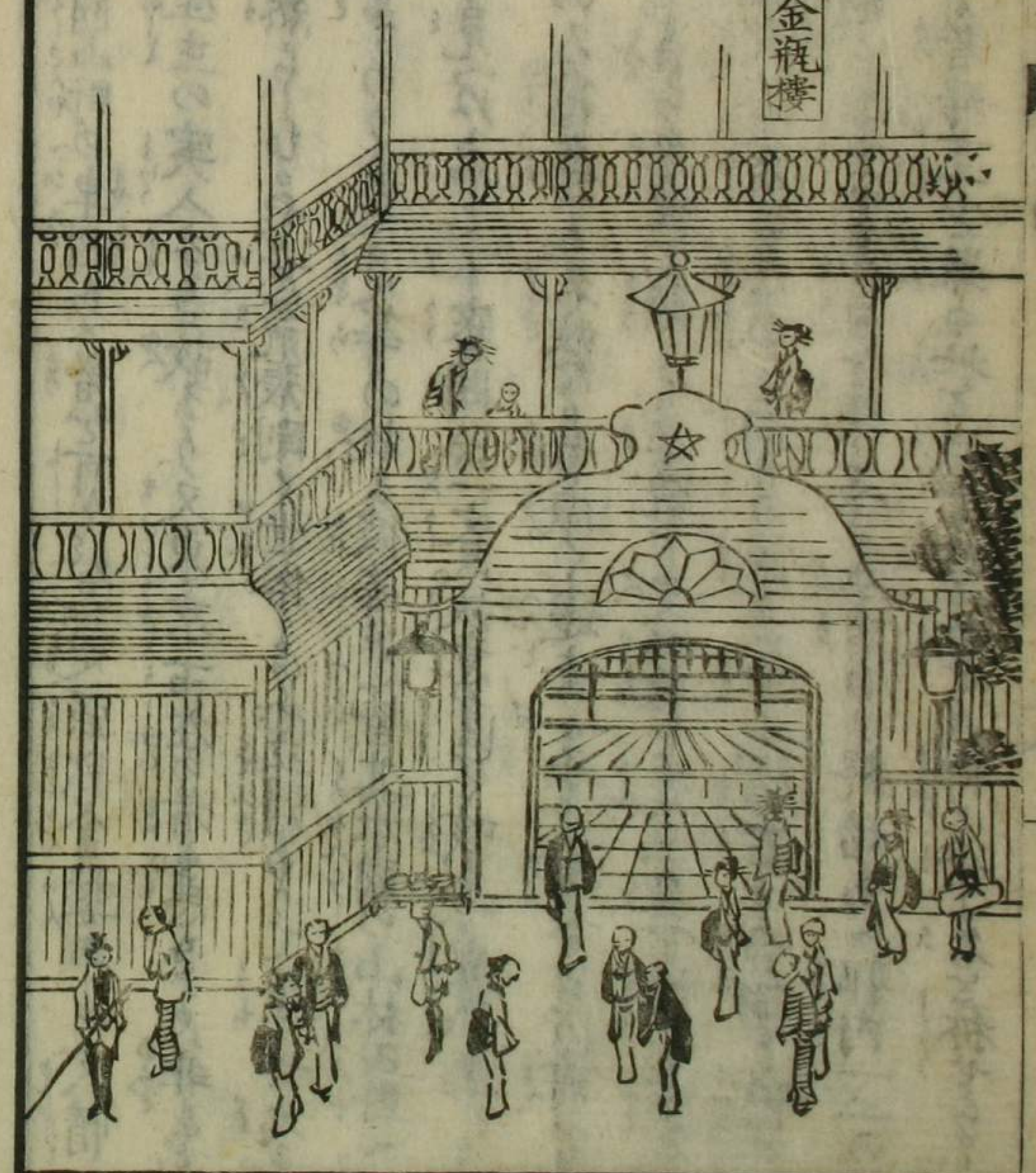


一斬髮床よ待せらる。客三三人例のどく。雑談空話益々ありぬ世間の
 噂は非を擧ぐ。他の疝氣を頭痛は病の中は盛ぬく一個の客肥と撫つ
 推量面は此程の解放ありきも称名き美人衆へ却て市中は窮して在る。
 と謂ふ一客首を振る。我思ふ所違へり世よ名を称する者ハ借使一個の
 賣女ありとも。一枚繪も出さる者ハ老衰の後ハ全盛の最中なりと。
 其身を脩る所致ありんや。平々たる俗妓のどき色と賣淫と隣りて自ら慢と
 尊大なり。方今開化の有難きを知らぬ一愚婆の類あり。若凡妓の一愚婆
 ありハ僅五ヶ所の郭内と云ふも三千の美競色ハ媚を售り婿争ふ中ハ
 全盛松位よつこと難う。是以推してハ窮達の理知るよ足らん。といふ一客
 听あへん然らば名たる云の行方も知らぬ不來由なり。但し傳聞しとあり。

總て遊女ハ遠國山野の卑陋あり者と可し。只是強欲貪婪女ハ人情
 小疎るる屋主の実入多き故あり。又東京市在の者ハ悪きハ非と
 上國水土の然らむや。意氣張剛く世俗より立引ありて屋主の為
 面白くらぬ事ありとぞ。是等の故ハ彼等悉皆其本國の山林田野ハ
 帰籍し影も見ぬと。不審問ハ一客ハ故意遙く咳き。豈然と云く
 子ガリとある愈違へり。名妓たる者咸く邊土の女子ハ有べからば前も
 論らひたる。自ら卑俚を顧みて姿貌を更形容を更下。身を慎と云を
 黙して小妓院ハ交房の悪婆と同日の談ハ非を信實ハ告諭を敬服
 一奉り。肝鑄心志して孝貞を顯すべき本末あり終始あり郭内二三の
 名妓あり心ある者婦女子と雖も此と感ず此と称せん。即ち世よ名を称せらる。

舊院風
流數頰
場梨園
往事泪
沾裳樽
前白髮
談元寶
零落人
間脫十

金瓶樓



娘舊時
南朝劇
可憐至
今風俗
鬪蟬娟
秦淮絲
肉中霄
簇玉津
拋殘作
笛鈿

五勢樓



者の不凡の爰あり。と揄揚しを止む。又一客の冷笑。然らば當今盛れを請て其身を再鬻し。郭内は残る者。咸性兇妻女ある歎と。詰るを彼客推止めて。吁子の奈何斯の如く。時勢は暗く人情は疎きことを言ふ。人々各幸不幸あり。才色も恃り且らば。事一概に附難し。と云時傍に。標輕者あり。子と市谷は寝られぬ。翹坊へ越たら甚麼といひ壞されて。空論に一同の笑ある。事と子とは通ひ一概と市谷の語路。却て説く。解放の主意。士民上下の差別。通附と時と時を變て。轉ト通ふ。なく。自由の權利を授けあり。抑自由の權と謂ふ。身射自由の權。本身自由の權。意思自由の權。出版自由の權。言詞自由の權。物件自由の權。是れ今般抱の娼妓藝妓の件の身體自由の權。本身意思而自由共ニ三權を授けらる。然れども自恣荒唐。舉止とも有らば。各家に立歸て。

親子兄弟和らぎ睦。孝順を盡さる。要らんとし者あり。己が身を顧て毛撰をせ。早く嫁きて身を修む。花の色香は將變て。鳩漿茶と為る。と速なり。將嫁して舅姑を崇。夫を敬て私る。其家は貯蓄。物件自由の權。さらなる。所有の權も自然ある。人道の明あるを。行ふ故。斯の如く。是。鰥寡孤獨の窮民を在せ。御仁政。是。於て昔を思。僅々たる身の代。身射物件自由の權を他人の為。奪はざる。身ハ帝郭内。蟄り。親兄弟も容易に對面を許されぬ。偶借老同穴を契。ふ花底活。錢无。れ。忽地。隔絶せらる。是本心自由の權を失はる。所以あり。既得ると。今。本身自由自在なる。開化の。御徳仰ぐべし。嗚呼。娼妓。年季中。四半折々の苦。他視。知をぬと。されば。

良家の女ハ外親の花中なるは余りとも思はず。野男が動止は俳優を
 扮ると同ト心は羨しがるも多しとるん因て苦界の涯界を抄出—以て
 戒とす。吉原大全明和五板曰く。女郎の身やど。憐は愛の物くら。朝夕の
 食事酒肴は錢のいらぬむろ。其外世間の世帯持は異らむ。座敷持部屋持
 家賃出さぬもの。開さへ近きせ。算用は入るころも元有る。元來定り
 調度手道具のいやもさらなり。油元結燕脂白粉櫛笄の流石質の似氣
 な。四季折々の小袖も。同ト物着て六仲町鬱悒く。禿と使ふ子持は
 等—鼻紙烟草ハ妹女郎の近重荷は小附とや言ん。席薦の表替。腰張
 襖障子提燈長柄の張之上草履駒下駄炭燭燭まで。孰も身身の臆
 ろくさへなし。中々も妓有花車鍼妙まで折は觸る人情衣の奉加

まぐも浄瑠璃太夫の會の摺物も面役は貫つ憂と思ひま。親方の祝
 佛事の獻備。女衞がめさうの志木懸ら。思ひこそ為め。殊も親里の
 悲しき便り聞は忍びず。向の人と喚子鳥。覺束なむも未だ便の母を
 勞ぐ。分て紋目物日の憂數筭へ初て一年のうき瀬積りて大晦日の
 提灯ハ胸と集は。炎とや見ん。託—客の工面さへ。間違の父見く。
 流は楫と絶る。掛乞のせむ力も。何く玉の春と幾年。長き年の
 勤の身ハ現るの苦しと哉云々。浩る辛苦と有せ。とて解放ありと
 又さらし。御思も耻もある鷺の片脚ハまど踏込る。泥水と脱得ま。
 新く免許の鑿札と乞く其身の分鬻ハ豈。官の御本意ある名。貧賤
 私情の窮迫と救をせあふ一時の權免の税と同様あり。此ハ身躰自由

の権彼ら六物件自由の権を假したる所なり。獨妓院々自由の
権を失ひしは似し事ども未だ自由の権と名目あらぬ昔より
幾許あるぬ錢とあり。他の女と幾年月自由の権を所したるを差引
勘定して見まは。敢て損毛の有さうらま。

馬車 并ニ人力車

往来給釋たる街上。塵埃猛然と起覆ひ。喪衣と奔る物あり。
雙馬一連の馬車之を。盤々として疾驅すること。
迅速奔雷彈丸羽箭の走る如き勢ひ。行過るを見送れば一瞬間は
疏忽と馬の忽地一寸許人の管豆を。神速此のてあるれ韋駄
天も指と唾へ神行太保も之蹴より。供を為ると難うべ。宜なるうた。

韋駄天が神通と雖も兩脚なり。戴宗が特む所の甲馬と雖も四枚なり。
一輛双馬八蹄の數は足らぬ及ぶ。斯も急ぐ車上の客。何人
や。何等の事件を主宰するや未だ聞ば。帝往來の盲人老人。
路傍は嬉戯も童子等の過らんを慮へ。戦々競々たらぬなり。抑
馬車は我國の古くは元とあり。衆車は古代天子を初め親王
執柄の大臣家五位以上まで。由法曹至要抄に見ゆ。但し車は
差あり。上下を正しく分ちる。海人藻芥を委しく載り。开と成
牛を牽せし車支那より早く。禹の時。美仲馬と加へし。字彙に載せ
しを以て見まは。此の馬車の始なり。其後三代兩漢。専ら馬車を用ひ
し。由群碎録に記し。然も駟の車。平民乘を許さぬ。故司馬氏

昇平橋より舟に乗る馬んぞ。此を過んと書くも。方今開化の本土より。乗車は甲乙撰むとほ。浩れが件の急ぐ者馬車一輛をらむ。尚くも官員國事の急を告る羽撒は齊一して。往來の妨げを顧るは違ふらぬ。獨自由の推勢くと眉を蹙め左よあむ。其它の馬車數十輛東西は東然と。南北は轉然と。後は每車の客を問ふ。余の急務のあらん。適急務する者も多し。商賈の私利を計りて。物件の代價の違ひ。贏餘を欲して奔走する耳。大概の遊觀淫酒は蒞り。已が娛樂の爲に來る支へ行を追ふ衆庶之途と失ひ。迷惑する者毎あり。或は貴人妻と同車し。彼帝の爲に車と辞す。班婕妤が賢を思ふ。上一人の帝王は。後世美人は相親める。画圖は作る。乱王あり。況や己臣庶ある。女色は親

一して往來は跋扈。礼を草莽の賢者に失ふも。自ら耻し。事を知らば。國事を建白する者あり。欽故は謝在杭の道るとあり。建白は。亂世の媒あり。との説得は是。富見は傲と。僭上。藝妓娼妓を同車あり。道路を穢し。は誇る儔の論むる。及むぬども。畢竟非常の用にある。有頂天と面白に。他の貧苦を想像ぬ。儻凶歳は。窮民門が。饑渴は。速むる必し。此は怨を報ひたる。古語は道り。富貴の家の。鬼常は。窺ふとやん。慎まむん。有べらば。這上品は。因て下品を。惟は。馬車の爲。あり子弟たる。人力車を牽徒は。極め。鄙賤の凡俗あり。凶年飢歳の用意あり。夢あり。風の嘖潰せし。其時粥も啜り得ず。日頃羨し思ふ。富家は強寄て救を乞ふ。憐む。又恐る。傳へ聞。方今都下。有る所の。人力車。

其數大約六万挺之を牽者幾千人や咸是一時の蒼蠅もよの群り起
る蚊も勝る雷聲を發しぬべし。蓋俗もの未未苦勞翌日の命もあら至り
何ぞと人の問ふとも露の身を經る世の中。来羊の事をさす謂ふ鼠が
笑や中ら責む三年先あつて鴉の所為に任せて措くも孰の年やら知も
せぬ向を彼此苦は病の昔の生鐵蝨東西より開化の今も要らるべ
然れば從前の駕籠は換へる。人力車の數万を以て算る程の夥しきを
晴雨昼夜の間斷る。牽違をさる地もあるれば負郭田間の窮里と雖も
車轍のあらざる路もある。或は一個の客を乗て後押前曳三入して
鷲直も馳るものも。兩客を駕と一個して辛くも牽て過るあり。駢々
釋々たる勢ひ。道路の泥濘或は又潦あつて泥を。那必だおまを避る。

中偏に拘らば好路を牽りて往來却て行きて其行過を待と多りり。
暫時もとも往々ある。貧民或は使の者之が為は急事を妨ぐ加旃道
普請の屢もとも。横町小路或は負郭の小町の度々の地盛の力足らぬ。勿心は
濼くして舊より悪き泥濘もありぬ。よりて下賤の馬車人力を快しとを
思ふねども錢融通の利の何れも。生るも便利と悦びて。廉價の車代は歩
より。得たやと各乗る。駕らで帰らば十錢の現も減らぬと思ふ。さるの
開化は進む人氣あらはし。或は男女同車あり。夫婦が知らぬと近附合。蝙蝠の
相合傘の和合の惡しきまあらねども夫婦別ある教の立。和漢禮樂尊重
の上國人の傲難あり。九二入駕と人力車廣き。非ざる之も乗る。兩個の
間は毛髪も容へらば。然るを男女相駕して前まづランケン一枚を共掛て

引張あひ上よの軒を覆る形容敢て其醜態を見ままで至らねども真よ
 一帖の春宮圖若夜行るる猶如何ん李下の冠瓜田の靴他の思んを慮ら
 皇國魂ある者の妻妾するとも憚るべし娘と雖も青春あへ決て同車
 まくくべ他其親子と知らねば鄙賤中て妻ある者よ羨しく思ふ意を
 動きさしむる無益あり爾乃世多き頑狼の徒の為よ思ひゆるぬ耻を
 得るん洋人男女の歩をを見るも夫婦親子知らねども互腕と組合
 く人前を憚らぬ彼國の風俗ありむ我邦人ありて之を為さば背後あり
 敗鞋を擲るん必定あり是人道の明なき國體の美る所則ち東方の
 君子國あり自ら禽獸よ異る礼義を重んじて其醜態を惡めばならむ
 浩まば他の妻子はさらなり義理ある親子兄弟も還曆以上は成らぬ身の
 六十一

男女の同車を憚るべしと又理屈の舊弊語くる言を唱へる廢物兒と弄
 られど開化を何処に問へらむ都盛大なる車の活用尙這器械世よ有
 らぬ人々大く不自由とて其興い支那の黄帝初て造とのり

皇國ゆゑ 天武帝の十二年は始めて製車と海東諸國記に載る有
 元品物運輸の為よ創造したる器械あるも今暈より大八が車の本家
 本元あり支那よ之を獨推車或は浪子車の稱あり後世千品は活用ち
 且万件よ其名を借り稱を得る東西和漢よ多有り就中龍骨車も
 田業の要具あり且米を搗ぐ人を養ふ車井戸も人の為よ能く水を
 輸せども汲桶の孰も参差して對ありぬを侘ぬらん帆車の音猫鳥の
 眠を覺し風車の廻る小兒の啼を歌む糸車よ妻が眞實を見せむを



後漢書

車銘 馮衍

乘車必
護輪治
國必愛
民車無
輪安處
國無民
誰與



錢車せんぐるまは女にが丹誠たんせいを顯あらわす。源氏車げんじぐるまは狐忠信きつちゆうしんが衣裳いしやうを定さだめり。片輪車かたわらぐるまは怪物かいぶつを引ひく。双ふた車ぐるま引ひく。兄弟あにがたが牆かきを闚ひらく。互たがひの忠義ちゆうぎ。壁かべ車ぐるまは初はつ花はなが。夫おとこを牽ひく。勝かちと。貞節せいせつ。丹に引ひく。淫婦いんぷの口車くちぐるまは衆しゆを引ひく。墜落たいらく。家うちの火ひの車ぐるま。果たまは身代みしろ限りかぎりす。是こゝら後のちは。將棊しやうぎ。羽はの飛車ひぐるまとも談合だんがの相敵あひて。成なりと。世よ人も死しす。世よの人ひとも。疎うとまれ。昨日きのうや香車かうぐるまは有あり。なり。汗あせ金銀きんぎんの利道きだうを。知らず。遣つらへ。挂馬けりまあり。婦ふの餅食もちくと。成なりと。ある。べ。其輦こしの輿こしは似にく。下賤げせん之のは駕かり。川か越えの蓮れん臺たいあり。其その駕意かゐを。試こなん。或あるは一個いっご越えの肩車かみぐるま。是こゝは肩組かみぐみの謬あやまり。肩かみ組ぐみの畧語りやくごあり。既すでは元禄げんろく十七年じゅうしちねんは。板行いたぎの俳諧書はいかいしよ。山中集やまなかしゆは伊勢いせの涼菟りやうとが。子持こもち猿さるを題いせ。句くは。か。か。か。の。子こ猿さるや柳やなぎの下した紅葉もみぢ。是こゝを證あかしと為なす。耳みみ。輜車そぐるまは俗よより。

御所車ごしよぐるま。御所ごしよは五緒ごじゆあり。五緒ごじゆの車ぐるまと。故実こじつと。文車ぶんぐるまへ用捨箱もちりすばこと並ならぶ。好古こうこの雅致がしを競まをす。花車はなぐるまへ揚國忠やうこくちゆうが。子弟しやくてい之のを玩あそぶ。開元遺かいげんゐ事ことは載のりあり。花見車はなみぐるまへ別べつは制せいなり。假令たとは馬車うまぐるまで。人力車じんりきぐるまも。花はなあり。地ちへ衆しゆより行いく。觀みるを即すなはち。林はやしあり。然さは。彼かの車ぐるまを停とめ。坐ます。愛あいも。夕暮ゆふぐの楓林かきりんを詠あめ。黄葉車わうはつぐるまと。久留真くるとまの神社じんじやは伊勢いせの國雄くにゆう畧記りやくきに。祀まつる。弟あに姫ひめと記しされ。淡路あわぢに在ある。假坐かりまあり。山城やまぢの嵯峨さかの里さと。車裂ぐるまぢりの神社じんじやあり。天武てんむの皇裔みまがら清原きよはらの博士はくし頼業よりなりと。祀まつる。車ぐるまの僧そうと聞きえ。七百年ななひゃくねんを歴試れきしす。跡あとは山州やまぢう太秦たせあり。海生寺かいせいじは遺ゐり。たり。車坂ぐるまざかは上野うへの東面とうめん。舊ふるくは紀州きしゆ熊野くまのに有あり。欽車きんぐるま樹じゆの陣法ぢんぽうは謙信けんしんの制せいも。所明紀しよめいきは。所謂しよゐ有脚あしありの城しろ。廣大くわんだいなる車陣ぐるまぢん。勝かちと。四車よぐるま

大八の芝の喧嘩は名を傳へ車善士の足を洗ふ。維新の 天恩を仰ぐ。まじ。通ひ車の小町は縁り三泣車の鄙吝を起る。車留の札墨黒く車屋の行燈紙白うり。鬼車鳥小児の襠褌を好む。毎年の人日はストントンと驚きさる。洗車雨の陰曆の七月六日は降をとり。火車の悪人死すと記。来り迎ふと世俗はとも。其後の不精も成る。提婆達多を生るから。迎て地獄へ入る。似む。近年悪人死まればとも。取て来きとも。班節殿炮灸く。鬼骸の異名は誇り。車渠形象を貝鍋の調室は慢む。車百合の卷丹の別種芳草の赤車使者。俗は蛇上戸といふ。車草は是續断。車前子車輪菜。是牛遺車鞅藤の嬰奠釀れば是葡萄酒あり。其它は車の名を假く。称するの勢くらぬ。介のを枚舉するとも。名奉と事ふもあつた。人を

相敵は為さむ。齒代も取ぬ贅語と。車屋は謚をも看官は倦む。斯くは開化に至らざる。作者の商法立難し。今一回毫と採轉して。車は要ある人事といふ。諺は輔車相依する唇亡びと齒の寒き。前車の覆ると以て。後車の戒と為ると。凡人間萬事過る。古製の車は種々あり。唐廂栴榔毛尼眉半部網代の車。花鳥餘情は注ぎこり。江次第は見ゆ鴨毛の車。海人藻芥は載る。唐車飾車糸毛の車。唐廂擯榔毛の車あり。咸是當時雲の上と。称するは貴人の衆なまふ所あり。車といふは轉輪也。マとワと五音の横通の。漢語之と車といふ。釈名。小舎といふ。之は乗る行く者。舎は居るが如し。黒漆にて塗る。大夫の乗るべき車。婦人の衆と容車といふ。坐して衆まて安車といふ。

倚衆と立車との門は長者の車輶多きは陳平が負郭の居車轄を
 井中へ投むる。陳遵が賓客の抑雷と為る當坐の計らひ古稀の齡は
 至りと車を懸ると稱する。薛德明が子孫の榮車丞相と千秋の老年
 勤仕の譽なり。葦車は衆して官に至る。袁忠が清亮なり。壽陽公主の
 車と破る。高道穆が忠直あり。兵車輕車は軍事の要輜車と雖も大なるは
 民用の重大なり。回轉捷速あるがれ。之と号けて太平車とす。是我俗云
 代八車。此稱は二箇あり。大八車は輪八葉代八車八人の力は換るといふ
 意あり。金根車を増飾する。鷓鴣車あり。鶴形車あり。或は三莖車九遊車
 共は驕車の淫車と謂べし。五色車或は七香車は天子の駕する車あり。
 青牛の牽は老子の車。白雀の集る。穆公が狩場の車。婦女は果菰と擲る

車は満る。潘安仁が美男の餘祿ふ。小兒は瓦礫を擲る。車は満るは
 左太仲が醜郎の不幸あり。蒼海公が鐵槌誤る。始皇の副車を碎き。漢の
 紀信が忠節詎て高祖の屋車に乗る。孔明が輪車。忽ち仲達を走らし。
 曹操が霹靂車。能く袁紹を破る。翔車は上戸の延を流し。鳩車は小兒の
 遊びを助く。螳螂が斧車は向ひ。雞狗の足車は曳る。少游が乗る下澤車は
 天工開物の圖と看る。大概今の入り車。成らふとあらん人の拙陋極あり。
 車名を更く。下澤車と稱する。弥文明と謂べり。あつたのものは一杯
 を過した大御酒の所為と謂まん。其醉者ハ車あり。墜ても害のあらず。
 其神の全きあり。と南華老人の謂れあり。指南車は太古黄帝之を造り
 を周公復造せし名高し。我朝 天智の御時。唐僧知由指南車と。

獻也。由國史よあまじき。其製今の傳らむ。蓋我洲五畿八道。幽郷山路
 は迫ると雖も。十里の間人煙の絶る荒蕪地曾て无し。東西南北行じて。
 指南車何の要有らむ。所謂美穀生の饒沃富貴東海獨立の帝國
 開闢以還文明ある君臣の道正しくして。神孫連綿する天朝の
 皇威の今を開化と云。御徳を以て民俗を革めぬ稱あり。則ち舊時
 の繁昌記を改め綴る國字文陋拙杜撰も一時ある。是本開化繁昌誌の
 世よ出る所あり。

東京開化繁昌誌第初編卷之下畢

○ 畫圖 三木光齋
 ○ 淨書 青木東園

發兌書目

東京神田明神下松住町

萬青堂 別所平七

四書集註 十冊

新點素讀本

枕山詩鈔 六冊

當時現存大家大沼氏詩集ナリ

皇朝名家絶句 三冊

時序名勝題画詠詩

近時盛行ノ絶句類撰ニ似ヒ
皇朝ノ名詩ヲ弘ク集メシ書ナリ

慶應十家絶句 二冊

枕山湖山ヲ始メ其他ノ名家
十名ヲ集ム

清十家絶句 二冊

錢謙益朱竹垞其他ノ十家ヲ
輯ム

清天基石著書家聯錦 全

書家席上必携語集

狩谷掖齋閱

萬葉假名梯 全

萬葉の字義音訓ヲ加ヘ改正ス

平野橋翁帝話

心學孝行種 三冊

本居宣長撰

秘本玉久ノ夢 二冊

皇朝經濟ノ事ヲ大人ヨリ去ル公ヘ上書ナリ

令集解 三十冊

古寫本校字

曲亭馬琴翁著

雅俗要文 全

○雅語又俗事ヲモ兼最面白キ文意多ク且解シ易カラシ為篇末ニ其字義出所等ヲ釈シタル能キ手簡ノ本ナリ

萩原乙彦著

全二編 全

○前編ニ倣フト虽凡文射旧俗ニ異ニ漢語ヲ旨トシ文明開化ノ奇文多ク童蒙進学ノ一助トモナルベキ書ナリ

萩原乙彦著

開化商賣往來 全

小室樵山書

同

皇朝單語字類 五冊

小学教則素讀本習字兼大字ニテ讀易キ書ナリ

萩原乙彦補編

漢語二重字引 全

同

十八史畧俗解 十冊 近刻

青木東園馬字

東京開化繁昌誌 再入 初編二冊 近刻

萩原乙彦作

三木光齋西

女大學 小室樵山書

真草千字文 同書

女今川 同

玉銚百首 同

女小學 同

發見書目

